

古田武彦の多元史観仮説による 日本列島古代通史

沼田 一道

目次

1	はじめに	page 1
2	各時代 (①～⑨) に対する筆者の基本認識	page 4
3	旧石器時代 (①) と新石器時代 (②) の様子	page 6
3.1	旧石器時代 (旧石器時代人)	
3.2	新石器時代 (縄文人)	
4	弥生時代 (③) と古墳時代 (④) に対する歴史観	page 9
4.1	戦前史観仮説:H1	
4.2	戦後史観仮説:H2	
4.3	多元史観仮説:H3	
5	弥生時代 (③) の日本列島 -多元史観に拠る-	page 13
5.1	稲作伝搬期の列島の様子 (②末-③初)	
5.2	弥生初期: 日本列島西北部のクニグニ	
5.3	弥生初期: 天クニの勢力拡大	
5.4	新石器 (縄文) ~弥生前期の日本列島人に言及した国外文献	
5.5	九州王朝	
5.6	弥生前中期: 九州王朝の勢力圏拡大	
5.7	弥生中期: 九州王朝の北方限界	
5.8	弥生中期: 四国・本州方面の状況	
5.9	弥生後期: 神武東侵	
5.10	弥生中期の日本列島に言及した国外文献	
5.11	弥生中後期: 邪馬壹国	
6	古墳時代 (④) の日本列島 -多元史観に拠る-	page 40
6.1	概観	
6.2	九州王朝の痕跡	
7	一元史観仮説 (H1-2) vs. 多元史観仮説 (H3)	page 52
7.1	それぞれの論理	
7.2	仮想的論争	
8	まとめ	page 57

1 はじめに

定年を過ぎ自由な時間が増えてくると、程度の差こそあれ、誰も「自分につながる昔のこと」が気になってくる。この想いは、自身の過去や父母・祖父母の生活を振り返るところから始まり、我々の共通祖先である「古代日本列島人」へと遡っていく。このような趣味は日本人に特有のものかもしれない。明確な自然境界を有し外部との人の出入が比較的少ない日本列島内¹で、自然と人、人と人との交流による同一集団内連鎖で発展してきた我々日本人にとって、日本列島に生きた人々の活動の跡を探ることは、自分を知らうとする自然な欲求の現れである。

日本列島人の歴史は、片山一道 [17]によると、3～10万年前の旧石器時代に遡るとのことである。片山は、現代に至る日本列島人の歴史を表1のように区分している。区切り方と名称については微妙に異なる様々なものがあるが、おおよそ、このような時代区分が定説として受け入れられているようである²。議論を進めるうえではどれも大差ないので、以下では表1の区分・名称に従って話を進める。

表1 日本列島の時代区分 ([17]p.22, 年は西暦, -は紀元前)

時代区分番号	年代	〇〇人	(時代)
①	-50000～	旧石器時代人	(旧石器時代)
②	-11000～	縄文人	(新石器時代)
③	-500～	倭人	(弥生時代)
④	300～	倭人	(古墳時代)
⑤	700～	中世日本人	(奈良・平安時代)
⑥	1200～	中世日本人	(鎌倉・室町時代)
⑦	1600～	近世日本人	(江戸時代)
⑧	1850～	近代日本人	(明治・大正期)
⑨	1945～	現代日本人	(昭和・平成・令和期)

それぞれの時代に関心を持つ専門家と素人(愛好家, マニア)がいる中で、多くの素人が「切実」な関心をもつのは、③, ④の時代である。日本列島に「統一国家」が現れてくるこの時代に我々の興味が向かうのは自然である。しか

¹ 若干の周辺地域を含む可能性はある。

² 時代区分③, ④の日本列島人の呼称には片山の主張が反映されているかもしれない。

し切実な関心の理由は、この時代の列島の様子について専門家達が説得力のある定説、あるいは対立する複数の仮説³を提出できていないことにあると思われる。素人は③, ④の時代に未解決の問題が存在すると直感する。

素人にとって、遺跡や遺物、史書や古文書などの一次資料を自力で調査・解読し、過去の事実を系統的に認識・理解するのは難しい⁴。当然ながら、専門家達のお世話になる。ある「時代」の基本認識において、専門家達の所説(仮説)が一致する場合、素人はそれを定説として受け入れ、その「時代」を分かった気になる。一方、基本的でない(非中心的で微細な)出来事の認識(解釈)については、説明を裏付ける資料が希薄なので、仮説と定説の差は小さい。素人はそのような事柄にはあまり深刻な対立を感じず、それなりの想像をめぐらせるだけで満足してしまうように思う。いずれにしてもこの種の史実が不明であることに悩みはしない。

問題は、基本認識について異なる仮説が複数並立し、定説が存在しない場合である。このとき、仮説間の交流が十分に行われた上で互いに他を否定できないということであれば、素人は仮説の集合を不確定的に理解し、分からないことを受け入れる。しかし、互いに他の説を「信仰に過ぎない」と非難し合ったり、伝統的な「仮説」を暗黙の「定説」と見做し、他の考え方を「仮説」とさえも認めず、実質的な議論を拒否することもある⁵。③, ④の時代の基本認識においては、実際にこのことが起きているように(素人には)見える。そしてこの場合、やむをえず、素人は諸仮説を自分なりに理解して「どの仮説が最も自然で、腑に落ちる」かを判断することになる。これは「仮説相撲」の観戦と「勝敗判定」ということで、素人にとって大いなる楽しみでもある。「既得権威」に囚われない素人の直感が真実により近い説を嗅ぎ分けるかもしれない。

以下第2節では、①～⑨の各時代に対する「筆者の理解」(多分素人の平均的理解)を告白し、素人の興味が③, ④の時代に向かう理由を確認する。

第3節では、③, ④の時代を考えたときの土台となる①, ②の時代について、大まかな定説と素人の印象を述べる。

第4節では、③, ④時代に対する三つの基本仮説を取上げ、それらを吟味す

³ 当然ながら、論争を伴う。

⁴ これができたら素人ではない。中には、これらを(部分的に)実行可能な素人(愛好家)が存在するかもしれないが、彼らは例外。

⁵ 素人の目にはそのように見える。

る。各仮説は、それぞれ、「戦前（皇国）史観」、「戦後史観」、「多元史観」に基づくものである。

第5節では、古田武彦の多元史観仮説に従い、②から連続する③の時代の列島の様子を巨視的な物語りとして描写する。それは、③の時代の流れの中で、「稲作伝来」、「天孫降臨」、「九州王朝」、「神武東侵」、「邪馬壹（臺）国」等の「事実」を合理的に繋ぎ合わせる。

第6節では、同じく多元史観仮説に従い、④の時代の列島の様子を概観する。ここでは、多数の成書が詳しく扱っている近畿王朝の事跡は省略し、九州王朝に焦点をあてる。九州王朝の場合、残念ながら『記・紀』のような自伝史書は残っていないので、国外史料に残された九州王朝関連の記事を年代順に並べて活動の跡を追う。

第7節では、③-④の時代を仕切る「一元史観仮説」と「多元史観仮説」を比較評価する。「一元史観」とは、本質的に同根である「戦前（皇国）史観」と「戦後史観」を一括りにした名称である。双方の主張、互いの反論を想像を交えて観察し、「仮説相撲」の形勢を判断する。素人である筆者には、「多元史観」に分があるように見える。

第8節はまとめである。本冊子を試みた動機、多元史観仮説（九州王朝論）の意義、考古学の専門家をお願いしたい「今後の課題」を述べる。

2 各時代（①～⑨）に対する筆者の基本認識

①と②は文字資料が存在せず、発見される遺物（衣、食、住、道具、作品）や遺骨などの観察・解析・関連付けを通して、その様子を想像・推定せざるを得ない時代である。極く限られた遺物の断片的（しかも大部分は写真等による間接的）見聞に基づく筆者の直感的想像は、片山[17]の所説に大きな矛盾なく包摂されると感じる。それは概ね現時点での「定説」でもあるということなので、文献[17]に沿って①、②の時代を理解することにした。理解（想像）の内容については第3節でもう少し詳しく述べる。

③と④の時代に関しては、

- A: 列島内史書（『古事記』、『日本書紀』など）
- B: 列島外史書（『後漢書』、『三国志』、『宋書』、『三国史記』など）
- C: 遺物・遺構（銅鐸、銅鏡、武器、墳墓、埋葬品など）

が残されている。

Cは当時の実在（事実）ではあるが、それ自体は言葉を持たないので、それのみで通史的仮説を構築するのは難しい⁶。通史仮説構築の基礎となるのはAとBである。ただし、AとBは人間が認識し記したもののなので、隠蔽や無視、捏造やデフォルメが常に問題となる。Aのどの部分をどの程度信じる（疑う）か、AとBの照合の程度、Cの解釈・評価によって、導かれる仮説は変わってくる。

③-④時代の通史的仮説の基礎となるのは、「戦前（皇国）史観」、「戦後史観」、「多元（王朝）史観」の3史観である。これらに対する筆者の理解・評価については第4節で述べる。評価の際は、A、Bの記述が日本列島のどの領域を対象としているのか、すなわち、一部の地域に限定されるべき内容を安易に列島全体に拡大していないかに注意する必要がある。

⑤～⑦は、“確かな”文字資料（史書、記録文書）が存在する時代である。⑤のはじめ（8世紀初頭）、日本列島に「日本国」が成立して以来⁷、その中心

⁶ 金石文は言葉を持つ点で史書に準ずる。それ以外は（何らかの）仮説を前提として解釈したり、局所的な「編年分析」、「地域関連分析」を試みることになる。当該の“モノ”が対立する仮説の核心に触れる場合は、仮説の当否を判定する強力な証拠になる可能性はある。

⁷ 8世紀以前から成立していたという説もあるし、そうではないという説もある。しかし、8世紀以降に「日本国」が存在したことは定説である。

部分の事跡は公式史書⁸として記録されてきた。遺跡・遺物も沢山残っており、多くは文字資料にも対応している。⑤～⑦における日本国の大まかな軌跡（中心事跡の連鎖）は定説として認知されており、その概略が中学、高校の「日本史（中世、近世）」として教えられている（例えば[18]）。もちろん、解像度を上げて細かい事象を追えば、素人の知らない専門家間の定説、定説に至らないもの、微かな気配はあるが資料のないもの、いまだ存在自体が知られていないもの（！）まで種々の興味深い話題・論点が存在するであろう。それらの解明は、歴史の理解をより豊かなものにするが、（素人の）理解の概略に大きな変更を迫ることは多くないように思われる。

⑧と⑨は日本の歴史が日本列島内に収まらなくなった時代である。少し前のことなので詳しい記録や多数の遺物が残っており、“表面的な”出来事を個別に辿るだけであれば概ね共通認識（定説）に達する。しかし、個々の出来事が時間的にも空間的にも相互にリンクし、関係する人間や集団（国）も多岐に渉り、様々な立場の記憶・記録が残されるので全体の流れを一意的に理解するのは難しい。一つの出来事でも見る角度によって全く異なって見えるし、複合した出来事は注目箇所によって認識が変わってくる⁹。もちろん、この時代についても膨大な出来事の認知・解釈についてはジャーナリスト、評論家、歴史研究者達の仕事に頼らざるを得ない。そこにおける、隠蔽や無視、捏造やデフォルメの可能性に注意しつつ、様々な専門家の捉え方・解釈をふまえて、素人なりに、“真実に近づいたという実感”を持ちたいと願う。

⁸六国史（『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『文徳実録』、『三代実録』）……

⁹例えば、「片側は黒く片側は白い羊」を別々の側から見る、あるいは、「大きな象（エレファント）」を局部的に探るような状況である。

3 旧石器時代（①）と新石器時代（②）の様子

3.1 旧石器時代（旧石器時代人）

①の始まりは、石器等が発見された遺跡の年代測定から大まかに推定したものである。超長期にわたるこの時代に、東北アジア方面から北海道へ、東アジア（朝鮮半島など）方面から本州域へ、中国・華南方面から琉球諸島へ、それぞれ陸伝いに歩いて来た人々が最初の日本列島人と考えられている。北海道から琉球諸島にかけて5000地点以上の場所でいずれも小規模の遺跡が確認されており、日本列島全体に血族・縁族集団で広く薄く分布し、採集狩猟生活で暮らしていたと推測される。以上は[17]で提示される仮説であるが、大筋では異論のない定説のようである。

旧石器時代人は我々日本列島人の起源と考えられる。ただし、長大な時間が経過しているので身近な繋がりを感じることはほとんどない。強いて言えば同じ日本列島に住んでいたということであるが、日本列島の様子も②以降とは大分違うようである。専門家達は新たな遺物（石器、木器、人骨等）の発見、年代測定の精密化、それらの親縁性解析などを通して、知見の拡大・詳細化を目指している。しかし、この時代の遺物はそもそも少ないうえに時間経過も大きいので新たな発見は稀であろう。発見があれば局所的な知見は増加するだろうが、そう簡単に全体的な理解の解像度が上がるとは思えない。素人としては、専門家の幸運と努力に期待はするものの、「何とかしてもっと詳しく知りたい」という程の切実感はない。

3.2 新石器時代（縄文人）

②は旧石器時代人が土器を作る（使う）ようになって始まる時代である。-8000年ころには、地球規模の温暖化による海面上昇が始まり（縄文海進）、日本列島は大陸から完全に切り離される。他地域から日本列島への大量流入は難しくその痕跡もないので、旧石器時代人が縄文人に変わったと考えるのが定説である[17]。土器の発明については古田武彦[11]が説得力のある仮説—3要因説—を提起している。3要因とは、旧石器人の成熟度（観察と模倣の能力）が必要水準に達したこと、意図せず遠洋を漂流する際の壺の必要性、そして

断続的に噴火する多数の火山の存在である。旧石器人は、噴火時の溶岩流による「火」で「土の変化」が起こることに気付き、壺の製造に応用したという説である。また古田は、土偶¹⁰を伴う東日本土器文明と伴わない西日本土器文明の2グループの存在は、日本列島を通る二つの火山帯が原因としている。

縄文時代は、おおよそ-11000年から、稲作が始まる-900年（九州北部）／-500年（関東南部）くらいまで約1万年続く。温暖なモンスーン性気候に覆われた日本列島において、照葉樹林がもたらす豊かな土壌、それを基盤とした植物・動物・水産物の恵みを受けながら、縄文人は世代を継いで日々の生活の技術を磨き、共通の思いを表現・交換する手段を編み出していったと考えられる。

筆者が住んでいる東京・八王子市界隈では、少し歩けば小さな縄文遺跡（住居群跡）に出会う、中には、「〇〇縄文公園」のような名前が整備されているものもある。都県をまたいで探せば、大規模集団遺跡とその出土物を保存・展示する「△△縄文博物館」、「□□縄文の森」のような施設（場所）が見つかる。縄文時代の人口は絶頂期でも20万人の規模[17]とのことであるが、平均10万人、1遺跡あたり50人として、100年に1回の引越しがあるとすれば、縄文時代に営まれた小住居群跡が日本列島に累計十数万箇所くらいは存在してもおかしくはない。当時の住環境からあまり変わらない現在の住宅地の周辺にはかなりの頻度で縄文遺跡が見つかるはずである。

共時的に存在した集落（住居群跡）はもっと少なく数千の程度かもしれない。しかし近隣の集落同士で何がしかの交流・交易ができる程度には存在していたと思われる。さらに中心的な集落同士を結ぶ広域的な交易ネットワークも存在したのではなかろうか。嵩張らない希少な鉱石（黒曜石、瑪瑙、翡翠）などは専門的な運搬人によって産地から集積地まで運ばれた可能性もある。

縄文人の姿形（すがたかたち）については多数残っている人骨から推定されているが、顔つきや体つきは食物や生活様式などによって大きく変化するので、素人（筆者）としては、限定的興味に留まる。一方、住居、食料、土器等の遺物から想像される縄文人の暮しぶりには親近感を覚える。竪穴式住居に炉を築き、野山川海で採取（狩猟、漁撈）した動植物を土器を用いて煮炊き（保存）して食す生活は、現在まで続く田舎の里山の暮らしの原型であろう。山と森を背景に低所に川が流れ、その間に広がる野原を生活の場所とした彼ら

¹⁰「土偶のルーツは大陸沿海州にあった女性骨偶だ」と推測している。

は、種々の恵みの源泉たる森や山に自分たちを生かす場の力を感じるようになったのではなかろうか。それが、「あらゆるものに“自分を見守る何か”を感じる」日本列島教（素朴な“神道”）の発端のように思える。

縄文人が何をどう考えていたかは想像するしかないが、遺された装飾土器や土偶や勾玉には、現実的な実用性を超えた出生や死、情感や心を見つめる精神性を感じる。現在も同じ形で作られる勾玉¹¹は日本列島人の心の形ではなかろうか。目の前の具体的対象や活動であれば身体動作で意思疎通できるが、精神世界の共有・交換となると音声言語が必要になる。新石器時代のどこかで、現代日本語の遠い祖先となる縄文語が生まれていたかも知れない。

一万年に渡る縄文人の生活の跡は、おびただしい数の遺跡・遺物として残されている。個々の遺跡の出現時期とそこで営まれた生活は、専門家達による発掘・解析作業により推定されているが、得られる知見は遺跡ごとに孤立した（歴史的時空間における）点情報に過ぎない。研究を進めれば個別的知見が広く蓄積されるであろうが、文字情報が存在しないので、新石器時代の流れを全体的に推定するのは難しそうである。素人としては、日本列島の中で外界人の流入なしにゆっくり成熟していった縄文人の生活（感覚）を思い浮かべるだけで満足である。もちろん、専門家の研究がこの想像をより豊かで確かなものにしてくれることは歓迎する。

¹¹勾玉は犬歯を模したという説もあるが、「人魂」や「人間の種子（初期の胎児）」を想起させる。

4 弥生時代(③)と古墳時代(④)に対する歴史観

③の時代は稲作の伝播を契機として始まる。といっても、列島内に一斉に稲作が広まったわけではない。国立歴史民俗学博物館によると¹²、稲作が日本列島に伝わったのは、-900年(北九州)~-500年(南関東)とのことである。稲作の浸透により、人々の暮らし(社会・自然との関わり)は地域差を伴いながら徐々に変化して、②から③の時代へ移行したということであろう。これは教科書レベルの定説で確かなことと思われる。

さらに、稲作面積の拡大や生産性の向上による集団への富の蓄積、先進的武器や文字や法や世界観(認識)の伝来が、集団の勢力圏/統治可能範囲を拡大し、④から⑤への移行(列島統一)を促した。これも教科書レベルの定説であろう。

その間、③-④の時代の列島全体のマクロ的変化の過程(古代通史)については、「畿内勢力が徐々に勢力を拡大して列島全体¹³を支配するに至った」という仮説と、「九州勢力が衰え¹⁴、併存していた畿内勢力に吸収された」という仮説が存在する。近畿を重視する前者はさらに、③の中期(後期?)に九州から近畿に侵入した集団(軍団)が一定地域を確保し、それが徐々に勢力を拡大して近畿王朝(天皇家)を作ったという「戦前史観仮説:H1」と、そうではなく、③の時代から続く畿内勢力がその範囲を拡大して近畿王朝(天皇家)を作ったという「戦後史観仮説:H2」に分かれる。九州勢力を重視する第3の仮説は、③の初期から九州北部周辺を中心とした勢力が存在し、その系統が④の末期まで(支那王朝に認知された)列島を代表する王朝(九州王朝)であったとする「多元史観仮説:H3」である。

どの仮説も下敷きにしている史(資)料は同じであるが、個々の記述に対する態度(重視、軽視、無視、修正)、空白(資料不在)部分の補い方により、推定する歴史は違ってくる。

¹²炭素14法で各地に残された稲を測定して推定した。

¹³九州から東北地方南部くらいまで。

¹⁴直接的には、朝鮮半島における勢力抗争への介入とその失敗(敗戦)の結果。

4.1 戦前史観仮説:H1

「日本国は、神代からの系譜を引継ぐ神武(イワレビコ)が九州・日向から近畿・ヤマトに侵入、周辺地域を征服して建国し、次第に勢力を拡大して日本列島を統一した」という仮説である。要するに、③-④の時代の(日本国の)権力中心の動向は(ほぼ)『記・紀』の記述の通りと考える。この仮説は、⑦の時代に『古事記』の注釈書『古事記伝』を完成させた本居宣長の仕事によって生まれた。⑧の時代には、「万世一系の天皇家」を世界に伍して生き抜く日本の「精神的支え=国家の伝統」とすることになった。仮説は徐々に公的な歴史事実として扱われるようになり¹⁵、皇国史観と呼ばれた。1945年の敗戦以後は仮説の地位に戻るようになったが、多少の修正はあるものの¹⁶、説の大筋は変わっていない。

現在、この仮説を主張する歴史家はあまりいないが、「万世一系の天皇家」を多くの日本人(特に1945以前の日本を再評価する保守的な人々)は信じているようである¹⁷。実際この仮説は『記・紀』編集時の虚偽(無視、盗用、捏造、改変等)を除去し、対象地域・時間帯を限定すれば、③-④時代の真実を地域限定的に押さえているように思える。しかしながら、神武以前を直接神代につないでしまう「断絶」は、歴史の仮説としての致命的欠陥である。この断絶は「神武東征(東侵)以前」を考えることにより明らかになる。

4.2 戦後史観仮説:H2

「③の時代に列島中央部(近畿地方)で徐々に勢力を増した集団が、④の時代に天皇家(大和朝廷)を中心として日本列島を統一し、現在に至る」という仮説である。近畿勢力による列島統一の根拠を、大規模古墳の存在と、同系統古墳(前方後円墳)及び同範鏡(三角縁神獸鏡)の分布等に置いている。

¹⁵例えば、神武の即位年を(書紀に従い)-660年とし、それを皇紀元年として実使用した。

¹⁶例えば平泉澄??は、「神武の皇紀元年(-660年)即位」は讖緯学説の影響による書紀編纂時の捏造であるとして、実際の即位年を、16代仁徳天皇(倭蹟に比定)の在位時期を420年、1代の平均在位期間を30年として、 $420 - 15 * 30 = -30$ 年ころと推定している。「神代から続く系譜云々」は、神武集団がそのような物語(説話)を持っており後世に伝わった解釈する。

¹⁷古田武彦が言うように「人間誰でも万世一系」であるが、ここでは、「日本国誕生以来、天皇家が日本国の権力(権威)の中心であった」という主張を指す。

戦後史観は、津田左右吉の『古事記及び日本書紀の研究』[19]¹⁸に始まる。その基本哲学は、「科学的信憑性を確保した学問として古代史を究明する」ことである。「文献を科学的に扱う」という考え方¹⁹は現在の古代史学会における圧倒的な主流であり、戦後史観仮説は中学・高校の教科書で「ほぼ定説」として扱われている。

「文献を科学的に扱う」とは、具体的には、「5世紀以降（15代応神）以降の『記・紀』の内容は、系譜・后妃名・豪族名等の傍証資料で確認できるので概ね事実と信じられる」、また「崇神-仲哀・神功（10-14代）の内容は、造作も含むが、統一事業（事実）の反映を含むようだ」、しかし「開化（9代）以前及び神代の内容は、殆どが編纂時（6世紀以降）に造作されたもので史実ではない」という立場である。当然「神武東征は虚構」ということになる。

「科学的立場」を貫くために、文献（『記・紀』）の神代及び神武～開化の部分（③の時代）を切捨てるので、③に関する仮説の基礎を「墳墓・埋葬（蔵）物」等の遺物に置くしかない。しかし、遺物自体は「時代の流れ」を直接物語る訳ではないので、（ほぼ）確かな文献の存する④の時代を基に、遺物を織込んで逆算解釈し、推定することになる。その結果、第0近似的な（変動を排した）推定として、「②に遡る近畿勢力が徐々に発展して大きな集団となり、その中枢が天皇家（大和朝廷）につながる」という仮説に落ち着く。③の時代の仮説の解像度をあえて低く抑えている印象を受ける²⁰。

この仮説の土台は「大規模古墳（前方後円墳）」である²¹。この古墳分布を証拠とし、崇神～仲哀の『記・紀』説話を援用して、4世紀中ごろには天皇家を中心とする近畿勢力が日本列島全体（九州～東北地方南部）を統一したとする。矛盾点や国外史料との齟齬は、（編纂時の）「造作・変造・不記載説」で説明する、また、九州勢力の活動と見做さざるを得ない場合は、（既に統一されているので）近畿天皇家の支配（影響）下で行われたものとする。この歴史観は、神武～開化・神代（③の時代）を除けば、戦前史観とほぼ同じである。『記・紀』の「信頼できない部分」を退けたことは、一見「科学性」を向上させたかのように錯覚するが、不具合が生じた箇所毎に「造作説」で対応する

¹⁸『記・紀』の文献批判を行っている。「皇国の尊厳を冒瀆した」廉で昭和15年に発禁処分を受けた。

¹⁹この旗印は誰にも否定できない。

²⁰例えば、銅鐸の存在と消滅については深く触れない。

²¹④を「古墳時代」と呼ぶのはこの仮説が現在の主流派だからであろう。

と、「大和朝廷による日本列島統一」さえ不動であれば、いかなる歴史の流れにも適合できてしまう²²。その意味で「無敵の仮説」ともいえるが、本質的に「大型古墳＝列島統一」の信念にのみ基づいているので、他の仮説に対して反論する力が弱いようにも感じる。とはいえ、公の教育研究機関に属し、「人文科学」を謳わざるを得ない歴史（古代史）研究者にとって、「科学性の確保」は選択の余地がない立場なのかもしれない²³。

4.3 多元史観仮説:H3

「③～④の時代、日本列島²⁴には複数（④末には二つ）の勢力（王朝）が並立していた」という仮説である。⑤以降の史実を基に③～④時代を逆算推定する近畿勢力（天皇家）中心の通史仮説 H1, H2 に対し、②の最終期状態から順方向に推定を行うので自然で論理的な印象を受ける。ただし、非近畿勢力（九州勢力）については『記・紀』のような直接的資料が残存しないので、内外の史書・金石文に記録された当該勢力の痕跡を抽出し、健全な（確度の高い）推理を駆使して仮説を導くことになる²⁵。古田武彦は一連の著作[1, 3, 4, 8, 9]を通して、この仮説を提起した。これら著書は当然ながら仮説の根拠を示すことに重点が置かれており、時間軸に沿って記述が進められる訳ではない。従って、素人（少なくとも筆者）がそれらを読んでも③～④時代の歴史の流れをイメージするのは容易ではない。次節、次々節では多元史観仮説の骨子を（論証を省いて）時代順に記して③～④時代の概略通史を描き出す。

²²このことは古田武彦が[4]（第2章）で指摘している。

²³思想・哲学系の学者、例えば梅原猛などは、所論の当否はともかく、この限界を超える。東洋史学者、江上波夫の「騎馬民族征服仮説」は極めて大胆な仮説であったが、ぎりぎり戦後史観及び「科学性」の枠内に収まるので、議論が成立したようではある[2]。

²⁴朝鮮半島南部を含み、北海道を除く。

²⁵九州、近畿以外の勢力については、その存在に触れるだけで、仮説の域には達しない。

5 弥生時代(③)の日本列島 —多元史観に拠る—

多元史観仮説は③～④の時代に関わるものであるが、まずは、比較的資料の豊富な③の時代を、この仮説に従い時間の順方向に(論証を省いて)描写してみる、

5.1 稲作伝播期の列島の様子(②末-③初)

②(新石器時代)の末期(晩期)、縄文人たちは、列島内²⁶の海辺・山辺(水辺)に集落を作って生きていた。それらの多くは小規模のものであるが、中には(少数であるが)大規模な集落²⁷も存在した。集落たちは、近隣相互の定常的な交流・交易を介して、全体が緩やかなネットワークを形成していたと考えられる。このネットワークの西北端に位置する集落²⁸は半島北部の中心勢力と交流を持ち、間接的に、大陸王朝とも繋がっていた。

このような状態の日本列島(+α)に水田稲作が伝わる。稲の品種は江南原産の「ジャポニカ米」、農具は「朝鮮半島経由」というのが定説である。種苗と栽培技術の導入に伴う人の移動・交流は当然あったであろうが、「大陸から(半島経由で)列島へ異質な集団の流入(渡来・定住)」があったとは考えられない²⁹。

水田稲作は紀元前10世紀ころ半島南部-対馬-壱岐-九州北部で始まり、徐々に九州南部へ、日本海沿いに山陰～北陸～(北関東)～東北北部へ、瀬戸内海沿いに四国～山陽～近畿へ、さらにそこから東海～南関東へと広がって行った³⁰。

稲作を取入れて安定した食料の獲得と蓄積が可能となり、同時に、開拓・灌漑事業における協力や集中的な労働力投入の必要性から、集落の規模は徐々に

²⁶朝鮮半島南部も含む。

²⁷古田は縄文都市と呼んでいる??。

²⁸朝鮮半島最南部にあったと考えられる。

²⁹縄文文化はそのまま弥生に引継がれており(例えば勾玉や土器文様、土偶など)、漢字・漢文の使用された痕跡もない。ただし、(食)生活の変化により、数世代を経て体/顔つきなどに変化が生じた可能性はある

³⁰国立歴史民俗博物館展示資料。稲作を取入れた人々を弥生人、まだの人々、または取入れをスルーした人々を縄文人と呼ぶと、この稲作伝播期は、日本列島(+α)に両者が混在した時代ということになる。狭い範囲内に両者が共存していた兆候もある。いずれにしても、地域的、環境的な時間差を伴って、縄文人が弥生人に移行したと考える。

に拡大したと考えられる。また、富(食糧)の蓄積は貧富(力)の差を生み、集落の中に、集団を率いる人やそれを補佐する人々が現れてくる。集落の規模が拡大し、他の集落と勢力圏が近接するようになると、新たな耕作地の獲得、水の使用を廻って利害の対立が起こる。そのような事態は、話し合いで友好的に、あるいは物理的な力で暴力的に解決されたのであろう。その結果さらに統合が進み、集団は次第に大規模なものになっていった(クニの誕生)。クニの統率者(達)は、より広く条件の良い土地、より多くの労働力を獲得すべく、中心地(統率者居住区)を移動したり、他のクニと同盟、あるいは支配-従属関係を築いて勢力圏を拡大していった。

5.2 弥生初期：日本列島西北部のクニグニ

稲作の普及しつつあった③の前期には、九州北部、日本海沿岸、瀬戸内海沿岸、近畿、中部、北関東などの各地に、(それぞれ縄文時代に遡る)クニが存在したと考えられる。このことは、『記・紀』(神代)の「国生み神話」に(部分的に)反映されている。そこには、以下の11州(クニ)が登場する³¹。

- ・筑紫州(福岡県北部) ・大州(島根県出雲近辺) ・越州(能登半島周辺)
- ・秋津州³²(大分県安芸津) ・壱岐州(伊伎島) ・対馬州(津島)
- ・億岐/隠伎之三子州(隠岐島) ・佐渡州(佐渡島)
- ・伊予二名州(愛媛県姫島) ・吉備子州(岡山県) ・淡路州(淡路島)

国生み神話は、朝鮮-日本海峡の両岸および海峡内諸島を本拠地とする(大陸の歴代王朝から「倭」と呼ばれていた)勢力の「世界認識」なので、近畿、中部、関東、東北地方のクニは現れない。

「国生み」の「道具」として使われる「天の沼(瓊)矛」は「天クニの玉で飾った矛」を意味するが、『古事記』の国生み神話には、「亦の名」として「天」が付くクニ(島)が、天比登都柱(伊伎島)、天之狭手依比売(津島)、天之忍許呂別(隠岐之三子島)、天一根(姫島³³;糸島半島北西部)、天之忍男(知訶島;五島列島)、天両屋(両児島;沖の島)と6島現れている³⁴。これら6

³¹神話で、イザナキ(伊耶那岐命)とイザナミ(伊耶那美命)の二神が生むのは「大八州(クニ、島)-8ヶクニ-」であるが、「古事記」、「日本書紀本文」、「書紀の5種類の」一書」と計7通りのリストが存在するので、延べて11の州(クニ)となる。

³²大日本/大倭-豊-秋津(おおやまと-とよの-あきつ)

³³この島には「天一根尊」を祭る神社がある。

³⁴後半3島は「然ありて(国生みの)後還ります時に生みたまひき」島である。

島は、いずれも「対馬海流上」の島々で、「天クニ＝対馬海流圏」を強く示唆する。さらに『記・紀』には、天クニから筑紫州、出雲国、新羅国へ「降（ふる）」という表現もある。これは天クニから3地域へ中継地無しに行けることを意味し、「天クニ＝対馬海流圏」説を補強する。

5.3 弥生初期：天クニの勢力拡大

「国生み神話」は紀元前5世紀ころ（弥生時代以前から）天クニと同時期に存在した周辺の国々の名を伝えている。中でも、筑紫州、大州、越州、秋津州は、天クニと同等あるいはそれ以上に有力なクニであったと推測される³⁵。その中で、有力ではあるが必ずしも盟主ではなかった天クニは、(地の利によって)いち早く導入した銅製武器（矛など）の優位性を背景に、周辺のクニ・地域を支配するようになる。『記・紀』の「国譲り神話」は、紀元前4、3世紀ころ、天クニの権力中心が従来の盟主であった大クニから「その統治権」を奪取したという事実を反映している³⁶。

その後、紀元前2、1世紀ころ、天クニの中心は、発祥の地である壱岐-対馬海域から、稲（米）の主要生産地であった九州北部（博多湾沿岸）へ移転する。『記・紀』の「天孫降臨神話」は、その事実を伝承したものである³⁷。移転

³⁵『記・紀』の神代説話は、国生み→自然神生み→伊耶那美の死→黄泉の国での対面とそこからの脱出へと展開する。帰還した伊耶那岐が禊・祓を行うと多数の子（神）が成り出るが、最後に（左右の目と鼻を洗うと）天照大御神、月読命、建速須佐之男命の三神が生まれる。天照大神は天クニから九州王朝、およびその分枝王朝である近畿王朝へ至る系譜（系統）の始祖とされる。同様に、須佐之男命は大クニから出雲王朝（出雲大社に痕跡が残る）へ至る系統の始祖とされる。二人は（神話上）姉弟であるが、これは「筑紫と出雲は兄弟国」を主張する表現であろう。実際には、大クニの誕生は縄文時代に遡り、天クニより古く格上であったと考えられる（出雲の国風土記）。一方、津島（天之狭手依比売、対馬）には、「阿麻呂留（天照）神社」が実在する。そこに祭られる天照大神（アマテルオオカミ）は、「一年に一回神無月に出雲の大神のもとへ出向く（参る）」という伝承が残っている。この伝承は、大クニ（出雲勢力）が天クニを含む広域の国々の盟主だった時期があることを物語る。ただし天クニの中心は津島ではなく、伊伎島（天比登都柱、壱岐）と推定されている。

³⁶神話では、天クニから派遣された天鳥船神と建御雷神が、大クニの統治者である大國主神（親）および事代主神と建御名方神（子；兄弟）と交渉する。交渉の実体が、談判のみか、戦闘行為を含むかは分からないが、武力を背景にした強要があったことは間違いない。建御名方神が敗れて逃げた諏訪湖周辺にも縄文時代から続く大きなクニがあったと思われる。

³⁷天照大神は孫の邇邇芸命を、「筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣」に天降りさせたとある。古田武彦は、その場所を「福岡県糸島市の（筑紫の）日向峠付近の（日向の）そそり立つ山容の（高千穂の）くしふる山-戦国時代古名-（久士布流多氣）」と推定した。

北陸・山陰から北部九州に至る日本海沿岸は（国譲り以降）天クニの支配下に入っているの、降臨に対する現地での（物理的）抵抗は無かったようである。しかし、福岡県周辺に伝わる筑紫

には多数の職能集団が付き従った。各集団の統率者は、『記・紀』編纂時点での近畿王朝内有力氏族（豪族）の「始祖」と注記されている³⁸。このことは、「天孫降臨」が史実を伝承していることを強く示唆する³⁹。天クニの王統（邇邇芸やその兄弟）と随伴支配層の子孫たち（どちらも本流と支流あり）は、博多湾沿岸を拠点として九州一円に浸透していったと考えられる。

5.4 新石器（縄文）～弥生前期の日本列島人に言及した国外文献

紀元前10世紀ころ（縄文時代終末期）に日本列島西北部の集落（クニ）で水田稲作が始まってから、紀元前2、1世紀ころ（弥生時代前期）に九州北部に列島西部のクニグニを束ねる九州王朝の前身が出現するころまでの日本列島の消息は漢代の書に僅かに記録されている。

『論衡』：後漢初期（1世紀ころ）に王充が著した思想書

（巻8）「周の時、天下泰平、越嘗白雉を献じ、倭人鬻艸を貢す。」

（巻19）「成王の時、越常、雉を献じ、倭人暢草を貢す。」

周朝初期（紀元前11世紀ころ）の宮廷風景に関連して「倭」が現れている。稲作導入のこの時期、日本列島（西北部）の人間が少なくとも平壤（箕子朝鮮）辺りまで行っていたことは間違いない。礼を尽くして貢献し、稲作の伝授を受けたということであろう。ただし周の時代に彼らを「倭」と呼んでいた

舞（神楽）は「現地の猿田毘古神（筑紫の大神）が降臨拒否を主張した」と伝えている。『記・紀』では、猿田彦は邇邇芸を案内したことになっているが、拒否の意思は（天宇受売が発する）何らかの“ハニーパワー”で懐柔された可能性もある。

³⁸（統率者名、職能、氏族名）はつぎの通り。（天児屋命、神事・祭祀、中臣連）、（布刀玉命、祭祀、忌部首）、（天宇受売命、舞楽巫女、猿女君）、（伊斯許理度売命、鏡製造、作鏡連）、（玉祖命、玉製造、玉作連）、（天忍日命、近衛軍、大伴連）、（天津久米命、軍事、久米直）。

³⁹「6～8世紀の近畿王朝-天皇家史官たちの造作」とした場合、記載氏族を選択し「始祖に関する虚構」を彼らに承諾させる必要が生ずる。しかし、自分たちの祖先の記憶に虚偽を持たせられるのは大いに抵抗があるだろうし、そこまでして史官たちが7氏族の始祖を記載する必要はなく、不自然である。また他の有力な氏族の始祖を何故注記しないのかという疑問も生ずる。ここは、「天皇家の遠い祖先と彼らの遠い祖先が行動を共にしたという記憶（対応する事実の伝承）が存在したので記載した」と考えるのが自然であろう。さらに、「降臨随伴者たち」の称号は、「神」と「命」に書き分けられている。前者は仮想的な説話上の存在、後者は実在の「人物」を反映していると感じる。邇邇芸の称号も「命」である。

紀の一書には、邇邇芸命の兄、天火明命（天照国照彦火明命）が尾張連らの遠祖とも書かれている。地方豪族であっても、記憶（伝承）が存在すれば採録したということであろう。天火明命は天橋立にある籠（この）神社の現宮司の始祖でもある。

かどうかは定かではない。周代に書かれたとされる『尚書』には「島夷（島にいるの夷）皮服。海隅，日を出だす，率俾せざるは罔し。」，同じく『礼記』には「東方，夷と曰う。被髮文身，火食せざる者有り。」とある。日本列島人に言及したものと思われるが、「倭」は使われていない。

『漢書』：後漢初期（1世紀ころ）に班固，班昭らが編纂した前漢史書。

（地理志，燕地の条）「楽浪海中，倭国有り，分れて百余国を為す。

歳時を以て来り献見すと云う。」

（地理志，呉地の条）「会稽海外，東鯤人あり，分れて二十余国を為す。

歳時を以て来り献見すと云う。」

前漢武帝（在位，紀元前141年～87年）のころの海外交流（の一端）を記したものであるが，文末の「と云う」は，「当時そう伝わっていた（以前から来献があった）」という意味にもとれる。少なくとも前漢代に倭人／東鯤人が長安に現れたことは確かであろう。「倭国」とは，そのころ九州北部（博多湾沿岸）に移動した天クニ王統が（直接）東ねるクニグニに他ならない。

「東鯤人」は，倭の東方，列島中域に存在したクニグニの人ではないかと想像される。さらに想像すれば，それらのクニグニは「銅鐸文化圏」を構成していたと思われる。「東鯤人」は，3世紀（弥生末期）以降，中国側への貢献を断ち消息不明となる⁴⁰。同時期以降の銅鐸が大和盆地内から出土しない（盆地外からは出土）という事実も存在する。

5.5 九州王朝

前2，1世紀，壱岐・対馬海域から博多湾岸へ拠点に移した天クニ王統（支配層）は，親和的なクニに対しては婚姻や談合で，敵対的なクニに対しては武力によって勢力範囲を広げていったと思われる。一旦和合したクニグニが再び相争ったり，王統に連なる不遇（不満）分子が離脱して遠く近畿圏（東鯤国）へ侵入（再降臨！）する等の紆余曲折はあるが，この天クニ王統（あるいはその禅譲王統）が，以後，列島西部⁴¹のクニグニを東ねる「九州王朝」となった。この王朝は古墳時代末まで続く。

⁴⁰日本側の記録も残っていない。

⁴¹半島南部，九州，本州西部

一方，2世紀ころ九州から近畿圏に侵入した一派は，現代にまで続く近畿王朝（天皇家）の祖となった。後述するように，弥生中期には山陰，山陽，吉備，近畿，越等にも，縄文時代に遡る王朝（王国）が存在したと考えられる。それらの王国の多くを束ねたのが九州王朝であった。大陸および半島の諸国はこれらのクニ（人）を「倭」と呼んで⁴²，時々の記録を残している。

降臨後の天クニ王統（九州王朝）の中核は，「天火明命（天照国照彦火明命，邇邇芸の兄）」の嫡流や，「邇邇芸命-歴代穂穂手見命」の嫡流であったと推測される。『記・紀』は九州王朝から離脱した近畿天皇家の手になる伝承（記録）なので，自分たちの始祖に至る系列⁴³しか記載していない。

5.6 弥生前中期：九州王朝の勢力圏拡大

九州王朝は，前2，1世紀の「降臨」以降2世紀末ごろまで，博多湾岸を拠点として（主に）九州南部方面へ自分たちの直接的支配圏を拡大していった。その事跡（伝承）は，時期と主導人物をスリ変えて，『日本書紀』に挿入されている⁴⁴。失われた九州王朝内史書を仮に『日本日記』と呼ぶことにする⁴⁵。

筑紫一円平定（図1参照）：年代は確定し難いが降臨から間もない時期に，櫃日宮（福岡市，香椎宮）に坐した九州王朝の王者（女王か）が，御笠（大宰府付近）を通って松峽宮（朝倉郡筑前町（旧三輪町），松峽八幡宮）に進軍。その周辺で荷持田村（のとりたふれ，朝倉市秋月野鳥）を拠点とする羽白熊鷲⁴⁶の軍と戦い，層増岐野（朝倉郡筑前町（旧夜須町））⁴⁷でこれを討ち取る。その後さらに山門縣（みやまし瀬高町山門）に転じ，その地の土蜘蛛-田油津媛⁴⁸（巫女女王）を誅殺した。兄-夏羽は兵を構え応戦しようとしていたが，妹が殺されたことを知り逃亡した。

⁴²遅くとも（前）漢の時代までにはそう呼んでいる。

⁴³天照大神-忍穂耳命-邇邇芸命-火遠理命（山幸彦，天津日高日子穂穂手見命）-鵜葺草葺不合命-神武兄弟（九州王朝離脱者，近畿王朝始祖）。「穂穂（火火）手見」は世襲名（役職名？）で，300年弱の時間の経過に対応する系統樹全体を表していると考えられる。

⁴⁴これらの伝承は6世紀ころ作成された九州王朝内の史書に記録されたと考えられる。それらの文書は今では失われてしまったが書紀編纂時には残っていて，近畿王朝（天皇家）により早期の九州支配を装うべく利用された。

⁴⁵その種のものが複数存在した可能性もある。

⁴⁶書記では，「強健で，翼がありよく高く飛ぶことができる」と表現されている。

⁴⁷糸島郡雷山を「層増岐岳」とも呼ぶので，古田はこちらに比定しているが，交戦場所としてやや不自然な感じもする。

⁴⁸同町大草の老松神社境内には，田油津媛を葬ったと伝わる蜘蛛塚（女王塚）古墳がある。

この「討伐譚」は仲哀紀の後に神功紀を設けた『日本書紀』にのみ記載されており『古事記』には現れない、『日本旧記』に記された樞日宮の女王⁴⁹の事跡を挿入・転用したものと考えられる⁵⁰。

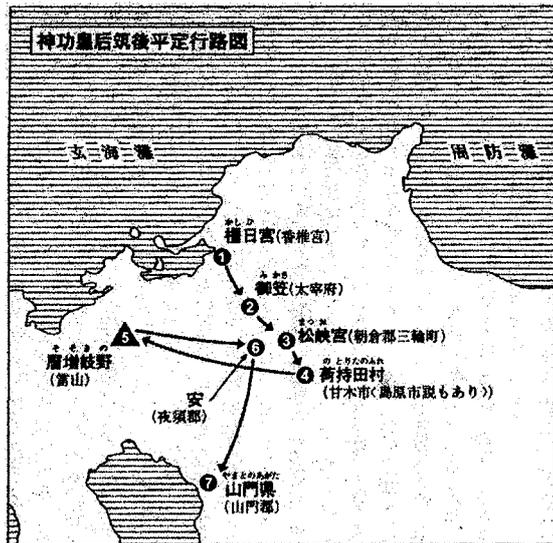


図1: 樞日宮の女王(九州王朝)の筑紫一円平定行路
(古田武彦『盗まれた神話』[4]より)

九州一円平定(図2参照): 前項の筑紫一円平定の後、(仮に推定すれば)紀元±1年前後、糸島市前原付近の宮室に坐した九州王朝の「大君(大王)」は、九州東岸部・南岸部の勢力を討伐し、西海岸・筑後北部を巡行して筑前の本拠へ帰還するという九州平定事業を行った。

『日本書紀』は『日本旧記』に書かれていた(であろう)記事の大部分を、「熊襲反(叛)之不朝貢」を導入句として、景行紀の九州遠征譚に、さらに一部を仲哀紀の熊襲征伐譚に挿入して近畿王朝による九州支配の体裁を繕った。これらの記事は『古事記』には全く現れない。

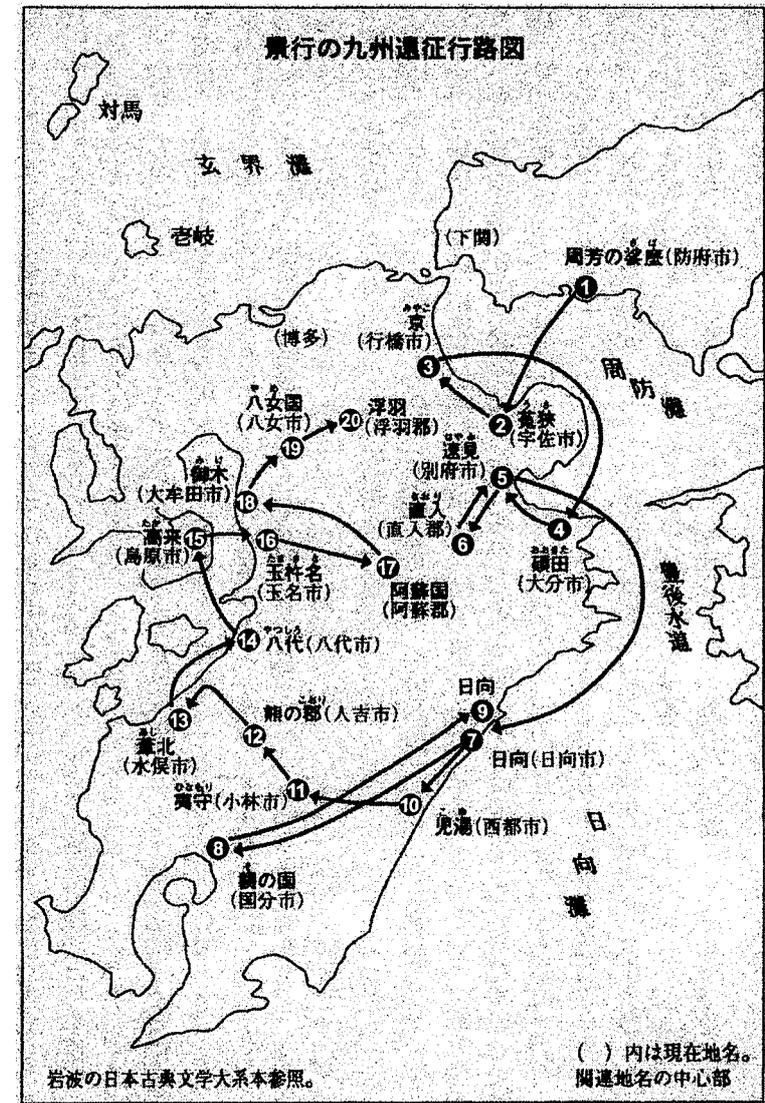


図2: 前つ君(九州王朝)の九州一円征服・巡行経路
(古田武彦『盗まれた神話』[4]より)

⁴⁹神功紀は女王であった「卑弥呼」や「耆与」の事跡を挿入しているので、この人物も女王であった可能性が高い。

⁵⁰挿入部分は客観的な記録(被討伐側の詳細な説明付)であるが、前後の文章は主人公(討伐側:神功たち)の内的な情意を記述して記述の仕方が明確に異なる。

景行紀の熊襲征伐説話には、「阿佐志毛能 瀨概能佐鳥麼志 魔幣菟耆瀨 伊和哆羅秀暮 瀨開能佐鳥麼志」という歌（漢字-音表記）が平定譚の最終盤に出てくる。古田 [4] は歌中の「魔幣菟耆瀨（マエツキミ）」が九州王朝の王（統一倭国の大王）「前つ君」を表すと推定し、（他の状況証拠も併考し）「景行の遠征説話は九州王朝史書からの盗用である」とした。

通説は、「群臣を訓読したものが 魔幣菟耆瀨（マエツキミ）」と解釈する。この解釈は歌の直前に置かれた、「時尙僵樹、長九百七十丈焉、百寮踏其樹而往來（時に倒樹あり、長さ970丈、百寮其の樹を踏みて往來す）」という文中の「百寮」を「群臣」と同類視することを根拠としている。通説は、これを支えに、書紀全文に現れる「群臣」、「群卿」、「卿大夫」、「公卿」、「侍臣」の類の語をすべて「マエツキミ」と訓読する（古田によれば「岩波古典文学大系：書紀」に、約220例あるとのこと）。

通説に基づく当該歌の解釈「朝霜の降りた御木（三池）の佐鳥橋を『群臣たち』は渡る、御木の佐鳥橋を」は果たして妥当であろうか？ 役人の一群あるいは不特定役人の平常の行動をそのまま詠んでも歌の感興には乏しい。筆者は、古田の云う「マエツキミ」は特定の人物を指し示す言葉で、「至高の王者の遠征からの成功裡の帰還（平定の終了）を厳肅に叙した歌」という見解に惹かれる。「マエツキミ」の解釈は多少不安定であるが、当否いづれにせよ、「景行紀が『日本旧記』からの盗用であること」は間違いないと思われる。

図2はマエツキミの遠征行路を順番号で示したものである。各活動地点（地域）における記事を簡単にまとめておく。『日本書紀』の原文は [20] を、現代語訳は [10] を参考にした。

- ④ 遠征軍本隊の発進地（前つ君の宮の所在地）は糸島市-前原辺りと考えられる。臣従する諸卿（侯）の船が関門海峡を越えた海域（沿岸）で本隊を出迎える。
- ① 穴門引嶋（下関市）で伊都県主（糸島郡）の祖五十述手が、周芳娑麼（防府市）で岡の県主（遠賀川付近）の祖熊罽が各自の権威シンボルを掲げて参陣する。周芳娑麼から偵察（使い）を送ると、磯津山（北九州市と京都郡の間の芝津山か）周辺的首長、神夏磯媛が権威シンボルを掲げて

やってきて、自らの帰順と討伐すべき敵の罪状を訴える。

彼（彼女）らの権威シンボルは、「船の舳先に（五百枝の）賢木を立て、その枝の〔上方、中ごろ、下方〕に〔八尺瓊、白銅鏡、十握の剣〕を掛けたものである。〔瓊、鏡、剣〕の順番はそれぞれ異なる。

- ⑤ 熊罽、五十述手は仲哀紀に、神夏磯媛は景行紀に記載されている。以下はすべて景行紀に記載されたものである。
- ② 菟狭の川上（ウサ、宇佐市）に屯する鼻垂、御木の川上（ミケ、三毛郡、築上郡、中津市）にいる耳垂、高羽の川上（田川市）にいる麻剥、緑野の川上に隠れている土折猪折の4首長（4集団）を誘い出し捕獲して殺害する。彼らの率いた集団は、先進地域の影響をあまり受けずに縄文時代の「素朴さ」を残した大集落（クニ）と想像される。独自の習俗を維持し先進地域と融和的でなかったので滅ぼされたのであろう。武力（武器）の差も大きかったと思われる。
- ③ 豊前国長峽縣（福岡県行橋市付近）まで進み、そこに行宮（かりみや）を設けた。その地の名称「京（福岡県京都郡みやこ町）」の由来。
- ④ 京から（多分）船で、碩田（おおきた）国（大分県大分市）へ廻る。
- ⑤ 速見村（速見郡）に進むと境界の首長速津媛が出迎え自ら帰順する。そして、山中の石窟（豊後大野市-旧大野郡）に住む2人の土蜘蛛首長（「青」と「白」）、及び
- ⑥ 直入縣禰疑野（竹田市菅生）にいる3人の土蜘蛛首長（打猿、八田、国麻侶）が不服従で、それぞれ相当の戦力を有し強ければ抵抗する意志のあることを報告する。前つ君は来田見村（竹田市久住町大字仏原）に行宮を設けて留まる。
その後、討伐を決定し、先ず青と白のこもる石窟を襲い、その一団を殺戮する。禰疑野の土蜘蛛には苦戦していったん退却したりするが、最終的には彼らも撃破する。
- ⑦ 日向国（宮崎県）に移動する。そこに行宮（高屋宮）を設けて基地とする。
- ⑧ 前つ君は、襲国（霧島市、曾於郡/市、都城）の熊襲を討つことを群卿と相談する。熊襲の国には渠師者（イサオ、勇者）である厚鹿文（アツカヤ）と辻鹿文（サカヤ）を始めとする多数の（80人？）島帥（タケル、

將軍?)がおり、強大な戦闘力を有している。武力制圧するには大動員が必要となるので、それは避けたい。そこで、梟帥の娘に贈りものをして手なづけ、彼女の手引きで梟帥を暗殺する⁵¹。暗殺(謀殺)ではあるが、武力対峙した状況での「首魁の消滅」なので、熊襲は屈服した。

- ⑨ 日向に高屋宮を設けてから6年。襲の国の平定を終え、日向国の美人・御刀媛を妃とする。彼女の生んだ豊国別皇子は日向国造の先祖である。
- ⑩ 子湯県(宮崎県児湯郡、西都市)の丹裳小野に遊び、「国しのび歌」⁵²を詠む。
- ⑪ 討伐・平定はほぼ終了。前つ君は九州西岸を巡行して京(ミヤコ、糸島市前原付近)に向かう。
- ⑫ 最初に夷守(宮崎県小林市)に着く。石(岩)瀬川のほとりに人が集まっているので「賊」ではないかと警戒するが、食べ物を献上しようとする諸県君泉媛の団であった⁵³。
- ⑬ 熊縣(熊本県球磨郡)に着く。その地で熊津彦兄弟(兄熊と弟熊)を呼出す。呼出しに応じなかった弟熊は討伐される。
- ⑭ 海を渡って葦北の小島に泊り食事をする⁵⁴。
- ⑮ 葦北から船出し日暮れになって火国沿岸に至る。暗い中「火の光⁵⁵」に導かれて着岸。着いたところは八代縣の豊村(八代市)。
- ⑯ 高来縣(島原市)を海路経由して、
- ⑰ 玉杵名邑(玉名市)に至る。この地の土蜘蛛津類を殺す。
- ⑱ 阿蘇国(阿蘇郡)に着く。人影の薄い阿蘇の原野に、二神(阿蘇津彦、阿蘇津媛)が人の姿で現れる。

⁵¹原文では「熊襲梟帥の娘」となっているが、誰の「娘」で、誰が暗殺されたのかは不詳。「娘」は、市乾鹿文(イチフカヤ)と市鹿文(イチカヤ)の姉妹。名前からすると大将らしき厚鹿文ないし淀鹿文の娘か、暗殺を助けたのは姉であり、事後に「不孝」の罪で殺される。妹は火国の造に贈られる。この暗殺譚は同じ景行紀に記された日本武尊の女装暗殺譚を思い起こさせる。ここでは、暗殺された熊襲の有力者は川上梟帥で、その名前は取石鹿文とされている。

⁵²『古事記』における倭健命の「国しのびの歌」と同一である。倭健は死を前に三重県鈴鹿市あたりでこの歌を歌った。

⁵³兄夷守と弟夷守が偵察に出る。

⁵⁴葦北郡は水俣市/芦北町/八代市の辺りであるが、小島は不明。その島で小左なる人物(山部阿弭古の祖)が湧水祈願して冷水を献上したことから、その島を「水島」と名付けたとある。八代市の球磨川河口には「水島」がある。昔はもっと陸から離れていたかもしれない。

⁵⁵誰(何)の火か分からないので「不知火」とよぶ。

- ⑲ 築後国の御木(ミケ、三池郡、大牟田市)に着き、高田の行宮に入る。近くに高さ970丈(約30m)もあるクヌギの倒木が埋もれてあり、百寮がそれを道がわりに踏んで往来したとある⁵⁶。
- ⑳ 八女縣(八女市)に着く。次の巡行地、的邑に向かう途中、南方の山の峰々の美しい重なりを眺めて(前つ君は)“神”を感じる。側らの水沼縣主猿大海⁵⁷が「山の中に、八女津媛という女神がいます」と応える。
- ㉑ 目的地(的邑)に着き食事をしたとき、食膳掛が酒杯(盞、さかずき、うき、うきは)を忘れたので、その地を「浮羽(うきは)」と名付けた。福岡県うきは市のあたりである。
- ㉒ 日本書紀はこの直後に「天皇至自日向」と記して「九州遠征」の記述を終える。尻切れトンボだし、浮羽一日向間の移動記録がないのは不自然である。これは景行の九州遠征譚が『日本旧記』(仮称、九州王朝の歴史書)からの借用であることを強く示唆する。
前つ君は、前原(糸島郡)あたりの王宮⁵⁸に帰還したはずである。その最終帰還記事は(書紀編者には都合が悪いので)採用されなかった。

以上二つの平定譚は、広範囲にわたる巡回先の地名が具体的に記録されていて現存の地名とよく対応している。また、行宮や滞在地点には神社や遺跡が残っていたり、各地の被討伐者の名前も墓や塚と共に伝えられている。

(A) よって、平定譚で語られる内容は実際に九州一円で起ったことと考えられる。

(B) 一方、『日本書紀』に書かれた通りに、「近畿王朝の天皇(皇后)の率いる勢力がこの平定事業を行った」と考えるのは極めて不自然(疑問噴出)である。

⁵⁶大牟田市歴木の高田公園に高田行宮址の碑がある。「百寮」は高級役人達で、遠征の間朝廷(糸島郡前原の本宮)を留守した彼らが高田行宮に着いた王者(前つ君)の許へ遠征終了の祝いに参上したのであろう。糸島の前原と高田行宮の間は4, 50kmである。

この記述の直後に、「阿佐志毛能 瀨能佐鳥鹿志 魔幣菟者瀨 伊和夕羅秀暮 瀨開能佐鳥鹿志」の歌が置かれている。倒木を踏み歩く「百寮」と、サトハシをイワタラス「マエツキミ」は異なる主体と思われる。

⁵⁷三潯郡(久留米市)の支配者。

⁵⁸王宮は大宰府あたりに在ったかもしれない。

多元史観仮説 (H3) は, (A) の実行主体を「九州王朝」とすることにより, (A) を肯定しつつ, (B) の不自然さを解決した. 津田 [19] に始まる戦後史観仮説 (H2) は, 「平定譚は書紀編纂時 (6 世紀以降) の造作」とし, (A) を否定することで (B) の不自然さを解消した.

5.7 弥生中期：九州王朝の北方限界

縄文時代に, 「列島・集落ネットワーク」の西北端が朝鮮半島の南東端に達し, 釜山・金海方面に倭人の集団があったことは確実である⁵⁹. これは, 半島南東端の位置⁶⁰や, 黒曜石の出土状況⁶¹を考えると自然で安定な推定である.

弥生時代には, 相当な規模の倭人勢力 (九州王朝に属する) が洛東江沿いの地域を中心に (継続的に) 存在したと考えられる. これが狗邪韓国であろう. 弥生期北部九州のものと同型の細形銅剣や土器, 甕棺が当該地域から出土するので, これも自然かつ安定な推定である.

3 世紀中葉の列島・半島の様子を伝える『魏志倭人伝, 韓伝』⁶²は, 「韓 (馬韓 卍 辰韓 卍 弁韓) は帯方の南に在り, 東西は海を以て限りと為し, 南は倭と接す (韓伝)」, 「(帯方) 郡従り倭に至るには, 海岸に循いて水行し, (諸) 韓国を歴て乍ち南し, 乍ち東し, 其の北岸狗邪韓国⁶³に至る (倭人伝)」と記している. これは, 九州王朝 (倭国連合) 成立以降も, その勢力圏が半島東南部に (継続して) 存在したことを示すものである⁶⁴.

5.8 弥生中期：四国・本州方面の状況

博多湾岸 (糸島市, 福岡市, 太宰府市) を本拠地とする九州王朝の王権は本州西端 (山口県) や四国西部にまで及んでいたと考えられる⁶⁵.

九州からさらに離れると, 独自の王朝が複数存在していたと考えられる. 大クニ (出雲, 石見) は, クニ譲りの後, 九州王朝に服属したわけではなく, やや下位ではあっても独立した王国として存続したと思われる. また, 越 (越前, 越後) にも日本海沿岸ルートで九州王朝と交流をもった王国が存在したと思われる.

両者の中間, 丹後 (京丹後市, 宮津市) 周辺にも王国があったという説がある. 宮津市には天照大神の孫, 天火明命 (邇邇芸命の兄) を主祭神とする籠 (この) 神社⁶⁶がある. 籠神社は「天の橋立」の近くにあり, 天クニとの関係を感じさせる. 越 (糸魚川) の南方にある諏訪湖周辺⁶⁷にも縄文時代から続く王国があった可能性が高い.

瀬戸内海方面に目を転ずると, 吉備 (岡山) 周辺には出雲に匹敵する有力な王国が存在したと考えられる⁶⁸. 九州王朝との関係は不明であるが, 出土する銅器 (矛, 戈, 剣) の類縁性から友好的な交流がうかがえる.

吉備王国の東, 列島中域 (兵庫, 大阪, 奈良の辺り) にも王国が存在したことが, 銅鐸の出土から推測される. 『漢書』が, 「東鯤人あり, 分れて二十余国を為す」と紹介しているクニグニで, 彼らが「銅鐸文化圏」を形成していたと考えられる. この地域は, 列島内集落ネットワークの中心部に位置するが, 大陸・半島からの文明伝搬ネットワークにおいては辺境の地である. 他の王国が「倭国」に連なり九州王朝との親和性を感じさせるのに対し, 「東鯤国」は異質・独立性を感じさせる.

⁵⁹その北方には, 異種族がいることも認識していたであろう. 彼らの領域を通過して半島の中心 (平壤) と交流していた可能性も高い.

⁶⁰天クニの故地である対馬からは, 福岡より釜山の方が近い

⁶¹佐賀県腰岳の黒曜石 (鏃) が洛東江流域 (河口は釜山) から出土する.

⁶²『三国志』巻 30, 魏書 30・烏丸鮮卑東夷傳・韓条/倭人条. [15]

⁶³釜山・金海の辺りにあったとされる.

⁶⁴倭人伝冒頭は, 「倭人は, 帯方 (郡) の東南, 大海の中に在り, 山島に依りて国邑を為 (つく) る」なので, 倭人連合の中心 (九州王朝) は九州にあると認識されている.

⁶⁵残念ながら確かな証拠はない. 『魏志倭人伝』に, 「女王国から遠く絶れた其の余の旁国」の一つとして「対蘇国」が挙げられているが, 「とさ (高知県)」のこともかもしれない. これらのクニグニは女王国に「属」している.

⁶⁶この神社の宮司・神職は, 天火明命を始祖とする海部氏 (あまべうじ) が担って現在に至る. 海部氏は尾張氏 (尾張連) と同祖ということになる.

⁶⁷クニ譲りの際, 建御名方神が逃げ込んだところ.

⁶⁸砂鉄の産出や塩の生産, 後に埴輪に変化したとされる特徴的な土器等で知られている.

5.9 弥生後期：神武東侵

九州王朝発展の過程で、その有力層である豪族達⁶⁹の中に、権力（王朝内での地位）や財力（耕作地・労働力）に恵まれない（不遇である）と感ずる「不満分子」が現れてくる。その中に、（伝承された先祖の行動に思いを馳せ）九州の外への「第二の天孫降臨」を考える者がいたとしても不思議ではない。

邇邇芸の降臨から2,300年経った2世紀ころ、その考えを実行に移そうとする人物が日向（宮崎県）に現れた。邇邇芸-山幸彦を始祖とする（という伝承を受け継ぐ）五瀬命と若御毛沼命の兄弟⁷⁰である。『記・紀』は、弟の若御毛沼命が、近畿王朝初代の神武天皇（＝神倭伊波礼毘古＝神日本磐余彦＝彦火火出見）となる過程を物語る⁷¹。『記・紀』が一致して物語る「東方侵入」譚は事実の大筋を反映した伝承と考えられる⁷²。

兄弟が東方侵入を考えたのは、九州王朝の高千穂宮⁷³に出仕して、列島中域（東鯉国）の様子を知っていたからであろう。倭国に連なる本州西部の諸王国にも同様のことを考える人々がいたと思われる⁷⁴。

- (1) 兄弟は東方侵入の決意を固めた後、本拠地の日向（宮崎県日向市周辺）で船団を整え出発する⁷⁵

⁶⁹ 彼らの多くは、王統の傍流を主張していたと思われる。

⁷⁰ 書紀は兄弟4人（五瀬と若御毛沼の間に稲飯命と三毛入野命）としている。

⁷¹ 『記・紀』の伝えるところ、兄弟は山幸彦（＝火遠理命＝穗穗手見命＝火火出見命）の孫であるが、降臨から2,300年が経っているのに、邇邇芸から数えて4代目というのは計算が合わない。血統の伝承は事実としても中間の祖先の個別名は記憶されず、“有名”山幸彦（穗穗手見＝火火出見）の末裔とのみ伝えられたのではなからうか。そのため、『記・紀』編纂時に山幸彦の孫（鶉草草葺不合の子）として接合されたのであろう。神武もホホデミの名前を持っている。鶉草草葺不合は山幸彦が他国漂泊中に儲けた非嫡流の子と思われる[4]。

⁷² 古田[9]は、弥生期の河内湾（湖）の存在、銅製武器（細矛、細戈、細剣）と銅鐸の分布、銅鐸の消滅、「淡路島以西不戦」問題等を根拠に6世紀以降の造作（創作）は不可能なことを論証している。また、「遠征の出発地を、天孫降臨地に合わせて、辺鄙な日向（宮崎県）に設定した」不自然さを衝く「造作」説に対しては、天孫降臨地は筑前（高千穂宮も筑前）、出発地は日向と分離し反論している。

筆者は、そもそも事実がなければそれを反映した伝承は存在せず、伝承がなければ「神武東征（『記・紀』）の記述は行われなかったはずだと考える。伝承がない状態で「近畿王朝の由来」を語りたい（造作したい）ということであれば、戦後史観仮説（H2）が志向するように、近畿を中心とする「神代神話・人代王朝発展史」を造るのが自然である。そうっていないのは、そうではない事実を反映した伝承が存在したからであろう。

⁷³ 古田[4]は筑前（糸島郡、もしくは博多湾岸、福岡県）にあったと「論証」している。

⁷⁴ 『日本書紀』は「神武（ホホデミ）たちは、塩土老翁から『東の方に良い土地があり、青い山が取り巻いている』と聞いて決意した」と伝えている[10]。一方、山幸彦（ホホデミ）が鉤を失くして浜辺で泣いているとき、「綿津見神の宮に行け」とすすめたのも塩椎神である。2,300年の時を隔ているが、「神武東征」の説話は山幸の説話を意識して重ねている感じもする。

⁷⁵ 書紀には、兄弟の「父」鶉草草葺不合は日向の吾平の山の上の稜に葬られたとある。鶉草草

- (2) 九州東岸を北上し、豊国の宇沙（大分県宇佐市）に停泊する。（九州王朝の）豪族、宇佐津毘古・宇佐津比売が「足一騰宮」作って神武らを迎える。東侵事業に賛同する豪族の子弟やその郎党が加わり実力（兵士、船、武器等）が増したと思われる。
- (3) 関門海峡を越え遠賀川河口近辺の岡田宮（福岡県、北九州市）に逗留する。この地でも九州王朝縁者の合流があったであろう。神武たちは九州王朝と円満に（暗黙の支援を受けて）離脱したので、以後紆余曲折があっても両者は何らかの関係を保ったのではなからうか⁷⁶。
- (4) 岡田宮を出て瀬戸内海を東に進み、阿岐国の多祁理宮（広島県安芸郡府中町）に7年、吉備の高島宮（岡山県玉野市）に8年逗留する。これらの地域は宇佐や岡田と親縁関係にあるが、一方で東鯉国（兵庫県、大阪府、奈良県あたり）に関する情報も有していたと思われる。神武たちは時間をかけて侵入の計画（時期、場所）を練り、目標地点を河内湾の最深部、日下-盾津（大阪府東大阪市日下）に設定した⁷⁷。

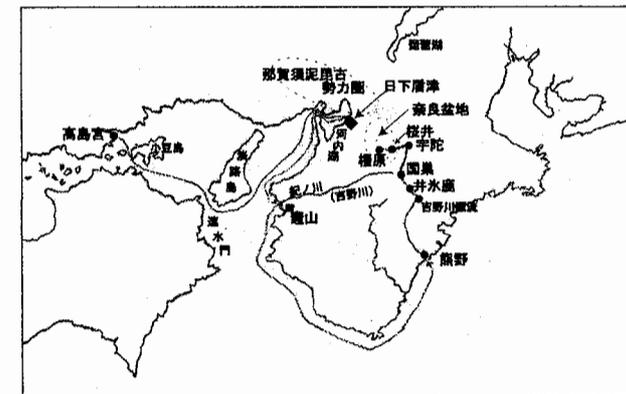


図3: 神武の東侵ルート（高島宮-岡山県玉野市-以降）
（古田武彦『日本列島の大王たち』[4]参照）

葺不合は実際には彼らの先祖だったであろう。また、神武は日向国の吾田邑の吾平津媛を娶ったともある（神武紀）。

⁷⁶ たとえば、有力な豪族は両方に分かれて存続した可能性がある。関係性は九州が「主」で近畿が「従」であろう。

⁷⁷ 船で行ける東鯉国のできるだけ東部ということで選ばれたのであろう。金属製武器は西高東低の傾向にあったし、吉備王国からできるだけ離れている方が何かと都合であろう。

(5) 高島宮を出て、速水門（鳴門海峡）⁷⁸、紀淡海峡を通り、難波津（大阪湾）から河内湾の最深部（白肩津-日下盾津）に突入する。

そこには、登美的那賀須泥毘古（ナガスネヒコ、登美毘古、東鯉国の豪族）が軍を興して待ち構えており戦闘になる⁷⁹。

戦闘の中、総大将である五瀬命が重い矢傷を負い、侵入軍は敗走する。船団は紀伊半島西岸沿いに南下する。五瀬命は泉南市男里付近で亡くなり、竈山（和歌山市、紀ノ川河口付近）に葬られたと伝わる。以後、若御毛沼命（神武）が統率者となる。

(6) 目的地（登美のあたり）は変更せず、侵入路を正面から搦め手に変える。紀伊半島南岸を廻り、熊野で上陸して、陸路で進軍する。移動経路に関しては縄文以来の集落ネットワークが機能したであろう。

熊野から、吉野川（紀ノ川）の源流を目指して北上する。そこからは吉野川に沿って、井氷鹿（吉野郡川上村井光）から国巢（吉野郡吉野町国栖）へと進む。国栖からは山道を通して宇陀（奈良県宇陀市）に至る。この間、天照大神と高木神の加護（八咫鳥の派遣、太刀降し）が語られたりして、神話・説話的な雰囲気を感じられるが、熊野から宇陀への移動は事実を反映したものと感じられる。

(7) 宇陀にはその地の土豪、兄宇迦斯（エウカシ）・弟宇迦斯（オトウカシ）がいた。兄は侵入に抵抗したので惨殺され⁸⁰、弟は兄を裏切り内通したので配下に取り込まれた。「抵抗する者も協力する者もいたが前者を排除した」という事実を伝えているように感じる。

(8) 宇陀から忍坂（おさか、奈良県桜井市忍坂）に向かう。そこには多数の土豪（土雲八十建；ヤンタケル）が大室（大洞窟？）に屯して待ち構えていた。神武は饗応すると称して彼らを陣営に招き、それぞれの建（タケル）に刀を佩いた膳夫（カシハデ）を配し（八十膳夫）、宴の最中、歌

を合図に全員を一斉に斬り殺した。

(9) 桜井市（忍坂）から少し西に寄った橿原市（畝傍）は、奈良県北西部に広がる奈良（大和）盆地南半分のほぼ中心に位置する。

登美毘古（那賀須泥毘古）の本拠地（登美）は、橿原の北方30kmくらいの一帯（盆地に外接）である。神武たちは大きく迂回しながらも何とか目的地の近くまで到達した。当然ながら「登美毘古支配地域の征服」を試みたであろうが、それには成功しなかったようである⁸¹。

神武は畝傍の橿原の宮に坐して、盆地の南半分を九州王朝（天クニ）の降臨地（天の下）として支配した。

以上は古田 [9] が推定した神武東侵の経過を『古事記』（訳注：[7]）の記述に沿って展開したものである。『日本書紀』（訳：[10]）の神武東侵に関する記述は『古事記』と大きく異なる。ただし、天クニ系の邇芸速日命（ニギハヤヒ）の出現の仕方は異なる。『記』は長髓彦の義弟とし、盆地南東部（磯城郡）の土豪、兄師木・弟師木を撃つ時に現れて臣従する。『紀』は邇芸速日命による長髓彦の殺害を記す。古田 [9] は、後者を「後代（編纂時）の改変」と判定している。

5.10 弥生中期の日本列島に言及した国外文献

弥生中期、大陸に存在した王朝の正史（『後漢書』）が、その時代の日本列島（倭）の様子を伝えている。

『後漢書』：南朝宋の初期（5世紀中葉）に范曄が記録した後漢正史。

（巻85・東夷列傳・倭、抜粋）

(a) 「倭は韓の東南大海の中に在り、山島に依りて居を為す。凡そ百余国。武帝の朝鮮を滅してより使驛の漢に通ずる者三十許国あり。国皆王を称し、世世統を伝う。その大倭王は邪馬臺国に居す。…」

(b) 「建武中元二年（57年）倭奴國貢を捧げて朝賀す。使人自ら大夫と稱

⁷⁸速水門（はやすいのと）は、他に、明石海峡（記の場合）、豊予海峡（紀の場合）という説もあるが、古田 [9] は「鳴門海峡が妥当である」と論じている。

⁷⁹日下（東大阪市）の東方10kmくらいのところに登美ヶ丘（奈良市）がある。このあたりが那賀須泥毘古の勢力中心か。

⁸⁰兄は恭順を促す使者（八咫鳥！）を鎗矢で追い返し対抗の意思を示すが、軍が整わないので、恭順を装い、押機（おし；踏むと圧殺されるような罠）を隠し設けて神武を殺そうとした。しかし、弟にそれを内通され、逆にその押機に追い込まれて圧死する。死体は引き出されて切り散らされた。宇迦斯達の主要武器は、弓矢や押機などの狩猟用具であり、対人専用兵器（剣、戈、矛）の導入は遅れていたようである。

⁸¹『古事記』は、八十建虐殺記事の後、登美毘古攻撃を意識して神武が歌った三首の歌を掲げる。いずれも「撃ちして止まむ」という（先の戦争中に使用された）戦意高揚のフレーズで終わる。古田 [9] はこれらの歌を解釈・分析して「神武は大和盆地に侵入した。それには確かに成功した。しかし、外部（大和盆地以外）の勢力たる登美の長髓彦たちには勝ちえなかった。」と結論している。

す。倭はこれ南界を極るなり。光武賜うに印綬を以つてす。」

(c)「安帝の永初元年(107年)倭國王帥升等、生口百六十人を献じ願いて見えんことを請う。」

(d)「桓靈の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐し、年を歴るも主無し。…」

(e)「会稽海外、東鯨人あり、分れて二十余国を為す。…」

- 倭(九州北部、本州西端部、壱岐・対馬海域と半島南端部に居した倭人たち)に関する記述の多くは、後漢当時の一次資料(伝聞・観察メモ、報告文書)から書き起したのではなく、既存の成書の内容を執筆時点での認識・常識に合わせて推定・解釈し纏めたという印象を受ける。実際、(a)と(d)は三国志・魏志倭人伝を下敷きとし、(e)は漢書・地理志に依っている。

- (b)と(c)は後漢時代の史官が残した記録から抽出した「後漢書オリジナル」のように感じられる。

(b)に記載された国名(倭奴国)は志賀島で発見された金印の国名(「倭」を省画して「委」とする)と一致していて、博多湾沿岸に倭国(倭奴国)が実在したことを裏付けている。

- (b)にある「倭はこれ南界を極るなり」の原文は「倭国之極南界也」である。古田は、最初、従来からの解釈「(倭奴国は)倭国の極南界なり」に従っていたが、後にそれを誤りとし、(最終的に)前者を採用した⁸²。

前者だと、倭(倭人のクニグニ)と倭奴国(後漢王朝が用いた倭人のクニグニの集合を表す国名)は同じものであり「倭人は(後漢から見た)南方世界の涯まで把握(到達)している」という意味になる。金印の「倭奴国王」を、「倭人のクニグニの集合(倭奴国)を束ねる大倭王」と理解する。

後者だと、「狗邪韓国から倭奴国にかけての地域」を倭と呼び、「大倭王の居る「倭奴国」⁸³はその最南部にある」ということになる。

漢王朝がモンゴル高原勢力を「匈奴」と呼んでいたことを考えると倭人のクニグニの集合を「倭奴」と呼んだ(前者の)可能性は高い。半島人は、現在でも、日本(人)のことを「倭奴(ウエノム)」と呼ぶことがあるが、これは語源が違う[16]とのことである。

- (c)は(b)の金印授与から50年後の記録である。「倭國王」とは、(b)と同じく、「倭人のクニグニの集合(倭国=倭奴国)を束ねる大倭王」のことであろう。光武帝以降(少なくとも)安帝のころまで、倭のクニグニを代表する大王が継続的に存在していたことが分かる。

半島の史書『三国史記』と『三国遺事』もこの時代の列島の様子を伝える。該当記事の冒頭を(f)~(h)に示す。原文(漢文)は室谷克実[16]から引用した。

『三国史記』: 高麗中期、大臣にして学者(儒者)の金富軾が国王(仁宗)の命で撰した旧三国(新羅、百濟、高句麗)の歴史書(完成は1145年)。

⁸²[3]のpp.537-539に訂正の経緯が書かれている。

⁸³「倭」の「奴国」という解釈は、古田[8]で明確に否定されている。

(巻1・新羅本紀、紀元前から後154年までの新羅王統の動向)

(f)「脱解本多婆那国所生也。其国在倭国東北一千里。…」

(g)「瓠公者未詳其族姓、本倭人。初以瓠繫腰、渡海而来。故称瓠公。…」

『三国遺事』: 高麗後期、僧一然が国中の文書、説話、伝承を渉漁して著した旧三国(新羅、百濟、高句麗)に関する異説集(完成は13世紀末)。

(h)「阿達羅王即位4年丁酉、東海浜有、延鳥郎、細鳥女夫婦而居。…」

- (f)は、第4代新羅王昔脱解が倭種(列島出身者)であったという説話である⁸⁴。「脱解は多婆那国の王子(の一人)として生まれたが、卵生(!)だったため忌避され宝物とともに海に流される。その後、金官国(金海市)を経て辰韓に流れ着き、2代王(南解)の女婿となり、4代王となった」と伝承されている。多婆那国は、福岡県北東部から新潟県あたりまでの日本海沿岸のどこかに存在した倭人(または倭種)⁸⁵のクニと考えられる。

- (g)は、瓠(ひさご)を腰に繫ぎ(浮輪にして)倭から新羅へ海を渡って来た人物が(馬韓との)外交交渉などで活躍し、後に大輔(総理大臣)になり、瓠公と呼ばれたという説話である。瓠公は倭国を構成するいずれかのクニからの政治的亡命者か逃亡者だったと考えられる。そのため、倭国に属する狗邪韓国(釜山・金海方面)を避けて新羅に渡ったのであろう[16]。

新羅本義には、時代が下ると「倭人侵寇記事」も多数出てくる[8, 16]。侵攻の基地は狗邪韓国(釜山・金海方面)内にあったと想像される。

- (h)は、新羅の東海の浜辺に暮らしていた延鳥郎(えんろうろう)と細鳥女(さいうじょ)の夫婦が、相次いで海を渡り“(故国)日本”⁸⁶に帰り、そのクニの王と王妃になる。夫婦の不在により新羅の日と月の光が失われるが、細鳥女の織った薄絹を使者が持ち帰り、それを祭ると日月の光が復旧するという神話風の祭祀譚である。

- このような説話・伝承は、「半島南部-列島北西部」地域の(当時の)実態を反映したものと考えられる。

● 草創期の新羅には、無視できない規模の倭人・倭種集団が定住しており、韓族、濊族、大陸流民らと友誼的・非疎外的関係を有していた[8]。

● 新羅の指導層は、倭国(=連合倭国)の存在(実体)を良く知っていた。

● 倭国(=連合倭国)と新羅(半島)を隔てるのは「海(だけ)」である。

要するに、(a)~(h)は「倭国=倭奴国=連合倭国」が九州王朝を盟主とするクニグニ(時期によってはその前身)に他ならず、それは対馬海流圏および海域の兩岸(半島側と列島側)に存在したことを示している..

⁸⁴9~12代および14~16代新羅王も脱解の男系子孫なので、彼らも倭系と言える。

⁸⁵倭国(=連合倭国)に含まれるクニグニの人を倭人、それに属さないクニの列島人(同種族、同言語)を倭種と呼ぶ。

⁸⁶編纂時(13世紀)の国名で記しているが、倭のクニグニの一つと考えられる。

5.11 弥生中後期：邪馬壹国

陳寿(233-297, 蜀-晋の人)が3世紀末に編纂した『三国志』中の「魏書30・烏丸鮮卑東夷傳・倭人条(以下, 倭人伝)」は, 弥生中後期の倭のクニグニの様子をかなり詳しく伝えている。ほぼ同時代の「(大陸-列島)王朝間往来(朝貢)」を踏まえているので, 「伝承, 伝聞」ではなく, 歴とした「記録文書」といえよう⁸⁷。冒頭の移動ルートに関する部分は以下の通りである(原文は[15]より, 地勢や行政官名称等は省略)。

倭人在帶方東南大海之中, 依山島爲國邑。舊百餘國, 漢時有朝見者。今使譯所通三十國。

從郡至倭, 循海岸水行, 歷韓國, 乍南乍東, 到其北岸狗邪韓國。七千餘里, 始渡一海,

千餘里至對海國⁸⁸。…方可四百餘里。…又南渡一海, 千餘里, 名曰瀚海, 至一大國。…方可三百餘里。……又渡一海, 千餘里至末盧國。…

東南陸行五百里, 到伊都國。…世有王。皆統屬女王國。郡使往来常所駐。

東南至奴國百里。…東行至不彌國百里。…南至投馬國水行二十日。…

南至邪馬壹國, 女王之所都。水行十日陸行一月。……

自郡至女王國萬二千餘里。

先入観を持たずに上記文面を翻訳(例えば[15])を参照しつつ読めば, 誰でも, 「邪馬壹国は北部九州(博多湾岸)に在った」と読み解くであろう。漢文解釈力が(筆者のように)僅少でも, 帯方郡(京城近辺)から倭の中心地(邪馬壹国, 女王之所都)へ至る行程が記述されているという前提で, 經由地間の里程が徐々に小さくなるのを見れば, 目的地へ次第に近づいている状況を表現していると感じる。これは言語を越えた(表現者の)普遍的心理と思われる。目的地が記されたとき, (使者は)既にそこに到達しているのである。

「倭(国)が対馬海流圏および海域の兩岸に存在するクニグニの連合体であり, その盟主国が博多湾岸に位置する邪馬壹国である」という倭人伝の記述は, 本節で見てきた(③の時代についての)多元史観仮説を強力に支持する。

一方, 多元史観以外の仮説(皇国史観や戦後史観など)に立つ場合, 邪馬壹国の位置決定には困難が伴う。それは, 倭人伝をあるがままに読んだ時に

⁸⁷もちろん, 関連情報を伝聞で書いているところもある。

⁸⁸[15]は紹興本によって「對馬國」としているが, ここだけは, 古田[1]に従い, (より古い「北宋・咸平本」の重刻である)紹熙本の「對海國」を採用した。

浮かんでくる場所(九州博多湾岸)と両史観が結論する場所(畿内大和盆地)が乖離するからである。江戸時代以降現在に至るまで, 多くの(非多元史観の)学者・研究者が様々な見解を提出しているが「定説」は存在しない。

「邪馬壹国比定地問題」は, ③-④(弥生-古墳)時代の通史仮説に対する「リトマス試験紙」であり, 未解決故に多くの日本人(専門家, 歴史愛好家)の興味・関心を引き続けてきた[14]。興味という点では, 比定地と並んで, 邪馬壹国女王「卑弥呼」の人物比定も人々を惹きつける。『記・紀』に出てくる「王」に近い女性をあてはめる訳だが, 『記・紀』の中に卑弥呼が現れているという保証はない。その点, 真の所在地が列島内にあることが(ほぼ)確かである比定地問題とは少し性質が異なる。

場所・人物の比定は概略以下のように分類される。

- 全否定説: 倭人伝全体を「記述内容に信憑性がない」として否定する[13]。当然ながら「邪馬壹国」に関する議論は不必要となる。古代“中国”(の史書)に対する根拠薄弱な軽侮を含み粗雑な議論と感じる。
- 熊襲偽僭説(本居宣長, 『馭戎慨言(ぎょじゅうがいげん)』): 魏の使者は「九州の筑紫辺り」で卑弥呼を名乗る偽者(本物はヤマトにいる神功皇后)と対面していた。使者は「本物の卑弥呼と会った」と嘘の報告を上げ, 陳寿はその資料を基に倭人伝を書いたと考える。邪馬壹国は邪馬臺国を誤写したものであり, それはヤマト(大和)にあったとする。ただし, 使者の道程が帯方郡から「偽」邪馬臺(台)国があった博多湾岸までとして書かれていることは認める。
- 出先機関説: 3世紀の時点で九州は既に近畿王朝(天皇家)の支配下にあり, 筑紫には一帯を治め外交も代行するクニがあり, 女王(卑弥呼)がいたとする説。使者はクニの名を本国の邪馬臺(台)国として報告した。倭人伝に記された道程が筑紫までとするのは熊襲偽僭説と同じであるが, 「偽」ではなく「出先の代理者」とする。
- 畿内説: 邪馬壹国は邪馬臺国を誤写したものとして文面の改定を行い⁸⁹, それは「ヤマト(畿内大和)」にあったとする説。この改定は, 松下見林が『異称日本伝』で最初に行ったとされる。

⁸⁹『後漢書(倭)』が『三国志(倭人伝)』の邪馬<壹>国を邪馬<臺>国に変更していることを根拠とする。『後漢書』以降に書かれたの歴史史書は<臺>としている。

明治時代以降も上記改定の上に立ち、さらに、方角の「南」を「東」に、「陸行一月」の「月」を「日」に変更して、「東至投馬國」、「東至邪馬壹国（5文字無視）水行十日陸行一日」と改変し、畿内に至る行程と解する説が唱えられている。しかし、この説は「女王國＝ヤマト」の結論に合致するよう（根拠なく）条件を変更するので、正しい推論になっていないと思われる。

纏向遺跡と箸墓古墳（奈良県桜井市）を邪馬壹国王宮周辺と卑弥呼の墓に比定し、遺跡からの大量の桃のタネや北陸・東海・関東～吉備・本州西部各地の特徴をもつ土器の出土をもって、「女王國（in ヤマト）⇒近畿王朝（天皇家）」を主張する論者もいる。しかし、これらは当該時期の畿内に縄文時代に遡る大規模集落（クニ）が存在した証拠ではあっても、そのクニが邪馬壹国であることを保証する訳ではない。桃のタネや土器にはについては、銅鐸を祭器とした在地勢力（東鯰国？）の可能性を考える必要もあろう。

畿内説では卑弥呼を、天照大神、倭迹迹日百襲媛命（7代孝靈天皇皇女）、倭姫命（11代垂仁天皇皇女）、神功皇后（14代仲哀天皇妃）など皇統（天皇家）に属する女性に比定することが多い。

- 九州説（非多元史観）：累積里程の概算見積りから、あるいは「邪馬臺（台）＝ヤマト」の発音が「山門郡（筑後）」に通ずるとして⁹⁰、女王国は九州北部（山門、朝倉、宇佐など）にあったとする説。

非多元史観九州説の場合、邪馬壹（臺、台）国は畿内勢力に征服されたとするか、逆に東遷して畿内を制圧したということになる。いずれにしても近畿を中心とする勢力が列島の大部分を（4世紀中葉までに）統一したという（天皇家中心の）一元史観に帰着させる。

非多元史観九州説では卑弥呼を天照大神に比定することが多いようである。九州にいた女王ということで田油津媛（5.6節参照）に当てる説もある。

古田武彦が日本思想史学科（東北大学法文学部）を卒業し、高校教員、親鸞研究を経て、(本格的に)「倭人伝」に取組み始めたのは(多分)30代半ばであ

⁹⁰邪馬壹国を邪馬臺国の誤写とするのは畿内説と同様。築後山門説の創始者は新井白石（『外国之事調査』）。

ろう。その時彼の眼前には、女王国の在処についての諸説が上記のように乱立していた。彼は（既存諸説や根本資料の調査分析を前提として）「健全な人間に備わる『不思議に思う心』と『なっとくする心』だけをたよりとして『倭人伝』を解読する」と宣言している⁹¹。

古田の解読は、「新たな比定地をも一つ付け加える」といった類のものではなく、新たな認識（九州王朝—多元史観）の端緒となる画期的な仕事であった。彼の解読の骨子は以下の通りである。

- 「壹」誤写説の否定：

『三国志（倭人伝）』に現れる「邪馬壹国」の「壹」は「臺」を誤写したものであるという説の不当性を、地を這うような検証作業により明らかにした。まず、3世紀前後の金石文（碑、鐘、鏡等）に現れる両字の形状比較を通して、「類似性はあるが、『間違い易い』と云える程には似ていない」という心証を得る。つぎに、紹興本『三国志』全65巻⁹²を探索して、86個の「壹」と56個の「臺」を抽出する。そこから検証対象である4個の「壹」（1個の「邪馬壹国」と3個の「壹与」）を除いた計138例について、「本来『臺』とあったものを『壹』に」あるいは「本来『壹』とあったものを『臺』に」誤写したという可能性を検討し、誤写が一例も生じていないことを確認した⁹³。

例毎に誤写が生ずる確率を p とし独立性を仮定すると、138例中に1個以上の誤りが生ずる確率 P_e は $P_e = 1 - (1 - p)^{138}$ である。 $p = 0.05$ のとき $P_e = 0.953 \dots$ なので、誤写が1つも生じてないことから $p < 0.05$ と推定できる。これは検証対象である4個の「壹」についても誤写の可能性が非常に小さいことを意味する。「女王国＝邪馬臺（台）国＝ヤマト（大和／山門）」という“音合せ”の呪縛は古田のこの作業により解消された。

- 「里」基準長の推定（短里の「発見）」：

『三国志』全65巻に現れる長さ単位「里」の数値を調べ、魏晋朝で用いられた「里」は1里＝75～90メートルであると結論した⁹⁴。これは、

⁹¹『「邪馬台国」はなかった』[1]の「はじめに」。

⁹²1～3巻は紹興本で代替したと思われる。

⁹³一例だけ、考証学者が誤写と指摘している箇所があったが、独自に吟味した上で「誤写ではない」と結論している。

⁹⁴東夷伝・韓伝の「韓（三韓）は帯方の南に在り、東南海を以て限りと為し、南、倭と接す。方

漢・唐で使われた「里」(1里=400~500メートル)とは別物であり、古田は便宜的に「短里」と呼んだ。「短里」と「長里」の両方が存在したことは疑いようのない事実である⁹⁵。王朝により異なる「規準長」を同一の単位名称「里」で表していたということである。

「倭人伝の里は通常の里(長里)の1/5程度(5倍の誇張)である」という発想は古田以前にも存在したが(例えば白鳥庫吉)、「誇張ではなく規準長が異なる」という認識を最初に公表したのは古田武彦だと思ふ。帯方郡治(京城付近)から一万二千「短里」である女王国(邪馬壹國)の位置する場所は九州北部に限られる。

●「水行十日陸行一月」の解説：

古田は、この日数が「どこからどこへ」行くのに要する時間であるかを明らかにした。

畿内説では「不彌國から南に水行十日陸行一月で邪馬壹(臺)國に至る」と解釈する。ただし「邪馬壹(臺)國は近畿(大和)にあった」という観念に立つので、記述を解釈するのではなく結論に整合するよう原文を改定(修正)する⁹⁶。しかし、帰結を問題にしている時に原文改定を行うのは禁じ手であるし、不彌國に至るまでの経由地の詳細な記述振りに比べ、不彌國から遠く離れた近畿なる邪馬壹(臺)國(女王國)へ至る間の記述の空白は、文章表現として極めて不自然である。

そもそも、「水行十日陸行一月」とはどれくらいの「道のり」であろうか。1日6時間・平均時速4キロメートルで歩くとすると267~320短里の移動となる。陸行1日を約300短里と見積もるのは概ね妥当であろう。水行の場合にも、季節と時間帯を選び1日12時間・平均時速2キロメートルで進んだとすれば、水行1日を約300短里と見積もることができる。要するに「水行十日陸行一月」は約一万二千短里ということになる。帯方郡治から不彌國までの区分行程を合算すると一万六百短里である。不彌國からさらに一万二千短里(水行十日陸行一月)進むと、少

なくとも二万短里以上となる。これは、少し後に記された「自郡至女王國萬二千餘里」と明らかに矛盾する。

古田は「對海國方可四百餘里、一大國方可三百餘里」に着目し、島を廻る(通過する)のに方形2辺の移動が必要であるとして、郡から不彌國までの道のりに、四百餘里×2+三百餘里×2=千四百短理を追加した。こうして得られる一万二千短里(=一万六百短里+千四百短理)は「水行十日陸行一月」に対応する道のりであり、「自郡至女王國萬二千餘里」に一致する。要するに、「水行十日陸行一月」は郡から邪馬壹國(女王國)へ至る道のりを所要時間で表したものである。よって、「南至邪馬壹國」は「不彌國の南方、道のり0で(ほぼ隣接して)邪馬壹國がある」ことを意味する。邪馬壹國(その都城)は博多湾域(湾岸と周辺山地)に在ったというのが古田の結論である。

卑弥呼については以下のように論じている。

- 卑弥呼は3世紀の人であり、神武は2世紀後半の人と推定されるので、卑弥呼に該当する人物は『記・紀』には現れない。
- 卑弥呼は「ヒミカ」と読むのが妥当である。倭語においては「日甕」を意味する。
- 『筑後国風土記』に現れる「甕依姫(筑紫の君、肥の君等の祖)」が卑弥呼を彷彿とさせる。
- 卑弥呼の第1回めの遣魏使(対明帝)は景初2年(238年)6月(8月に遼東の公孫淵が滅ぶ直前)に行われた⁹⁷。
- 卑弥呼は正始8年(247)年ころ亡くなる。彼女の墓は直径30メートル前後。場所は、吉武高木遺跡-須久岡本遺跡を含むエリアのどこかと推定される。

古田は、倭人伝に取組む中で、陳寿の(倭国関連の)記述が5.4節、5.10節で紹介した歴代大陸王朝の継続的な歴史認識を踏まえたものであることに注

四千里なる可し」を根拠に、四千里を韓半島の南西端から南東端の海岸線の長さ300~360キロメートルで見積もり、1里=75~90メートルを導いている。

⁹⁵古賀達也(<http://www.furutasigaku.jp/jfuruta/kaihou47/koga47.html>, 2001)は、「千里眼」、「五里霧中」、「千里馬」等の「里」を含む成語・成句を取上げて考察し、「短里」と「長里」の両概念が存在したと論じている。また、谷本茂は、周代に淵源をもつ天文算術書『周髀算經』を考察して、周代に「短里」が実在したことを論じている。

⁹⁶「南」を「東」に、「一月」を「一日」に改定(修正)する。

⁹⁷「景初3年」に改定する説が根強いが[18]、古田は[1]のpp.123-130で改定不当の根拠を述べている。明帝は卑弥呼の貢獻に応じて景初2年12月に詔勅を出している。「汝(卑弥呼)を親魏倭王と為し金印・紫綬を假え...返礼品と汝(卑弥呼)への贈品(併せて莫大な下賜品)を贈る...」明帝は景初2年12月に発病し、景初3年1月に亡くなる。詔勅は発病直前に出されたものであり、それが実行されたのは正始元年(240年)である。

目した⁹⁸。これは、縄文末期以降、朝鮮-日本海峡の両岸および海峡内諸島に「倭」と総称されるクニグニが盟主国を擁して継続的に存在したことを裏付けるものである。盟主国の交代、王城の移動、クニの吸収・合併等があったが、王統（九州王朝）は保存されていたであろう。

古田はこの認識を踏まえて『記・紀』を吟味・解説し、本節で見てきたような「九州王朝説（③の時代の多元史観仮説）」を展開したのである。

6 古墳時代（④）の日本列島 一多元史観に拠る一

④時代の九州王朝については（国内の）直接的な史料がほとんど残っていないので、その様子を具体的に想像するのは難しい。一方、近畿王朝については『記・紀』を始めとする史料が豊富に存在する。それらは列島中央部での活動に関する限り⁹⁹概ね史実のようである。従って、この時代の近畿王朝については、例えば、高校の日本史教科書にあるようなイメージで比較的安定している。本節では、直接的な史料の欠落を国外史書で補い、④時代の九州王朝の動向を、多元史観に拠って探ってみる。

6.1 概観

弥生（③）時代末期、対馬海流圏両岸・九州・四国西部・本州西部に「倭」と呼ばれるクニグニ（倭連合、九州王朝）があり、奈良県南部には九州から離脱・侵入したクニ（大和王朝）があった。また、日本海沿岸の出雲・丹後（丹波北部）・越（福井、富山、新潟）、瀬戸内海東部の吉備・播磨・摂津、さらにその東の東海・信州・関東等の地域にも、縄文（②）時代に起源をもつクニ（王朝）がそれぞれ存在した¹⁰⁰。これらのクニグニは全体としてネットワークを構成し、物品や情報の交換を行っていた¹⁰¹。相互の力関係は、倭連合内部を除けば対等、あるいは緩やかな先進-後進関係であったと考えられる。ただし、倭連合は盟主国が近隣のクニグニを支配・監督しており、対外的に列島を代表していた。その実力（文明力）は他の地域から抜きん出たであろう。また、大和王朝（近畿天皇家）は本家である九州王朝（倭連合）と密接な関係を有し¹⁰²、そこから導入した文明力で近隣（近畿地方）のクニグニを征服・支配しようとしていた¹⁰³。

古墳時代（④の時代）¹⁰⁴になっても、九州王朝（倭連合；大倭／倭国等）が

⁹⁹九州に関する記事、半島・大陸の王朝との交渉記事、大化の改新（乙巳の変、蘇我氏、聖徳太子）、磐井の乱、白村江の戦い、壬申の乱に関する記事には不審な点が多々ある。

¹⁰⁰大陸王朝は、「倭」に属さないクニの人々も「倭種」と認識している。

¹⁰¹支配者間の通婚や、（倭国の王統に連なる）貴種の流入もあったかもしれない。

¹⁰²有力層の中には、親族が両王朝に分かれて活動・存続したケースがあったと思われる。人的交流も少なからずあったであろう。

¹⁰³これは神武の遺志である。

¹⁰⁴④の時代を「古墳時代」と呼ぶのは、列島中央部を中心にこの時代を眺める視野の狭い伝統史観（4節のH1とH2）を反映したものである。

⁹⁸倭人伝冒頭の記述や、古（いにしえ）より使者が大夫を自称していたことなど。

引き続き日本列島を代表していたと考えられる¹⁰⁵。九州王朝は、半島内に残存した古来からの倭人居住圏（狗邪韓国，弁韓，伽耶，任那等）をめぐって半島・大陸の諸王朝と衝突／友好／後見の関係を継続的に繰返しつつ，7世紀後半に対立が煮詰まって破局を迎える。一方，列島中央部に位置し九州王朝とも繋がりをも有する近畿王朝（天皇家）は，地の利と直伝の文明力を背景として，初期には武力で近隣地域（近畿地方）の直接支配体制を確立し，中期には拡大した実力を背景とした示威的巡回行動（威嚇・誘導）により，山陽・山陰東部から東海・関東に至るエリアの主導的立場を手に入れた[9]。後期になると，半島の王朝（新羅・百済）とは直接，大陸の王朝（隋）とも九州王朝に便乗する形で交流するようになる。ただし両王朝の実力が接近してきたこの時期でも，九州が主で大和が従という関係性は変わらなかった。しかし九州王朝（倭国連合）は，「白村江の戦い」の敗北（663年），それに伴う唐軍の九州進駐（駐留）によって崩壊へ向かう。これに呼応し，中央部で実力を蓄えた近畿王朝が列島の大部分を掌握して④の時代が終わる。

6.2 九州王朝の痕跡

多元史観仮説を「合理的」と感じる理由は，大陸・半島の歴代史書が前漢時代（あるいはそれ以前）から一貫して継続する¹⁰⁶「倭」勢力の活動を記録していること，そして近畿王朝の自伝史書である『記・紀』に，それに対応する活動の記述が存在しないことである¹⁰⁷。

以下では古田の『失われた九州王朝』[3]に従い，[15, 10, 7, 21]を参考に「倭」勢力の対外活動記事と同時期の近畿王朝の大王名・関連記事（あれば）を年表風に並べてみる。年表は表2～表7の6部分に分かれる。各表は，それぞれ，下記の国外史書に基づく。国内史書は『日本書紀』を参照している。

- 表2：『三国志』倭人伝＋『三国史記』新羅本紀，
- 表3：七枝刀銘文， ●表4：好太王の碑文，
- 表5：『宋書』夷蛮倭国＋『梁書』諸夷倭＋『三国史記』百済本紀，
- 表6：『隋書』倭国伝， ●表7：『旧唐書』倭国伝＋『旧唐書』日本伝。

¹⁰⁵変化を示すような痕跡は，内，外どちらの史書にも残っていない。

¹⁰⁶内部での権力交代はあったかもしれないが，異質な外部勢力の征服による断絶は無かった。

¹⁰⁷それらしい記述を編纂時に挿入したと思われる箇所は多数ある。

各表に対応する時間帯は以下の通りである。

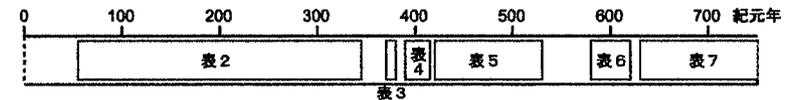


図4：表2～7の対応年代

表2-1 九州王朝の対外活動：弥生（③）中後期

西暦年	元号年	国外史書	天皇年	国内史書
57	建武中元2年	倭国奴，奉貢朝賀す。金印授与。使人自ら大夫と称す。		
108	永初元年	倭国王，師升等，生口160人を献じ，請見を願う。 男王，住まること7,80年		
147～188	桓・靈の間	倭国大いに乱れ，更々相攻伐し，曆年主無し。乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。		
233		（新羅本紀）倭の女王卑弥呼が新羅に使者を派遣した。		
238	景初2年6月 公孫淵滅亡は景初2年8月	倭の女王，大夫難升米等を遣わして（帯方）郡に詣らしめ，天子に詣りて朝貢せんことを求む。太守劉夏，吏を遣わし得い送りて京都に詣らしむ。その年12月詔書ありて倭の女王に報えて曰く，「... 親魏倭王と為し，金印紫綬を仮え... 難升米を以て率善中郎将と為し，牛利を...」	神功紀38*年	神功紀38*年は，神功紀38年の真の対応西暦年358から「120を減じた」西暦238年を表す。以下「神功紀〇〇*年」は「神功紀〇〇年」より干支2巡前の年を表す。 景初3年（神功39*年）魏志に曰く，倭の女王太夫難升米等を遣わし...
240	正始元年	太守弓遵，建中校尉梯シュン等を遣わし，詔書・印綬を奉じて倭国に詣り，	神功紀40*年	魏志に曰く，正始の元年に建中校尉梯シュン等を遣わして...（神功紀）
243	正始4年	王，使いの大夫伊声耆，掖邪狗等8人を遣わし，生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹木等を上献す。掖邪狗等耆しく率善中郎将の印綬を拝す	神功紀43*年	魏志に曰く，同左（神功紀）
245	正始6年	詔して倭の難升米に黄幢を賜い，（帯方）郡に付して假授せしむ。		

（つづく）

表 2-2 九州王朝の対外活動：弥生 (3) 中後期 (つづき)

247	正始 8 年	女王卑弥呼, 狗奴国の男王卑弥呼と争い, 郡に SOS. 郡はこれに報える.		
		卑弥呼死す		
253		(新羅本紀) 倭人が飢えて食を求めて千人も新羅へ渡った.		
		更めて男王を立つれども, 國中服せず. 更に相誅殺す. 卑弥呼の宗女, 壹与 (13 歳) を立てて王と為す. 國中遂に定まる.		
265		(魏: 咸熙 2 年 → 晋: 泰始元年)		
266	泰始 2 年	張政等檄を以て壹与に告諭す. 壹与, 率善中郎將掖邪狗等 20 人を遣わし, 張政等を送りて郡に還らしむ. 因って壹に詣り, 生口 30 人を献上し, 白珠 5 千・孔青大句珠 2 枚・異文の雜錦 20 匹を貢ぐ.	神功紀 66*年	晋の起居注に云わく, 武帝の泰初の二年の十月に, 貴倭の女王, 訳を重ねて貢獻せしむといふ.
268		(新羅本紀) 倭軍が新羅を攻め, 新羅は伊伐淦の昔利音を派遣して防いだ.		
292		(新羅本紀) 倭軍が新羅に侵入し, その王都金城を包圍した. 新羅王自ら出陣し, 倭軍は逃走した. 新羅は輕騎兵を派遣して追撃, 倭兵の死体と捕虜は合わせて千人にも及んだ.		
347		(新羅本紀) 倭軍が新羅に攻め入り, 一礼部 (地名, 場所は不明) を襲撃して火攻めにした. 倭軍は新羅兵千人を捕虜にした.		

表 3 九州王朝の対外活動：古墳時代 (4) 初期

西暦年	元号年	国外史書	天皇年	国内史書
321				神功紀元年
369	泰和 4 年	(七枝刀銘文) 泰和四年□月十一日丙午正陽. 造百鍊鋼七枝刀. □辟百兵. 宣供供侯王□□□□作. (以上表) 先世以来, 未有此刃. 百濊王世子. 奇生聖音. 故為倭王旨造. 傳不□世. (以上裏) (奈良石上神社に現存)		
372			神功紀 52 年	(神功紀: 百濟記から) 神功 52 年秋 9 月の丁卯の朔丙子に, 久匹等, 千熊長彦に従ひて詣り. 則ち七枝刀一口・七子鏡一面, 及び種種の重宝を獻る. (応神記, 国内伝承) 亦百濟の国主照古王, 牡馬壹疋, 牝馬壹疋を阿知吉師に付けて貢上りき. 亦横刀及び大鏡を貢上りき.

表 4 好太王の碑に記された九州王朝の活動：古墳時代 (4) 中初期

西暦年	好太王年	国外史書	天皇年	国内史書
391	辛卯年 好太王元年	百殘 (百濟) 新羅舊是屬民由來朝貢而倭以辛卯年來渡海破百殘 (百濟)		応神あるいは仁徳の時代に相当. 『日本書紀』によれば, 西暦 391 年は 応神 2 年または 仁徳 18 年.
~395	5 年	□□羅 (新羅?) 以為臣民		応神紀には百濟関係の記事が多い.
399	9 年	九年己亥百殘遣誓與倭和通王巡下平壤而新羅遣使白王云倭人滿其國境時遣使還告以口訴		百濟王の交代 (辰斯王-阿花王-直支王-久爾王) や阿直岐・王仁・弓月君らの渡来が記されている. (『百濟記』から引用/ 造文)
400	10 年	十年庚子教遣步騎五萬住救新羅從男居城至新羅城倭滿其中官兵方至倭賊退		西紀とも, 新羅, 任那, 加羅, 高麗, 吳などの国名が現れるが, 現実味と具体性に欠ける. 新羅とのトラブルはやや具体的だが説話風.
404	14 年	十四年甲辰而倭不軌侵入帶方界倭寇潰敗斬殺無數		西紀とも, 宮廷内外の「平和な出来事 (含事件)」が叙述の中心で, 対外的な軍事活動の気配は感じられない.
412		好太王 (広開土王) 死		
414		長寿王, 好太王碑建立		仁徳紀の「民の籠の煙」の話は有名であるが, 軍事行動と「非課税」は両立しないであろう.

表5-1 倭の五王（九州王朝）：古墳時代（④）中期

西暦年	元号年	国外史書	天皇年	国内史書
		(梁書54・諸夷, 倭)「晋(東晋)安帝(在位: 398-418)の時, 倭王讚有り」		在位年(紀, 干支表記)と対照すれば, この讚は仁徳, 履中, 反正, 允恭のいずれかに当たる。
421	宋:永初2年	(宋書97・夷蛮, 倭国)詔して曰く「倭讚, 万里貢を修む。遠誠宜しくあらわすべく除授を賜う可し」と。	允恭紀10年	宋への貢献記事は全く現れない。允恭は病弱で即位を辞退していたが周囲の強い要望で即位。允恭3年, 良い医者新羅に求める。その治療で完治。
425	宋:元嘉2年	(宋書)讚, 又司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献す。讚死して弟珍立つ。(珍)使を遣わして貢献し, 自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・募韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王と称し, 表して除正せられんことを求む。詔して安東將軍・倭国王と為す。倭隨等13人を...	允恭紀14年	『記・紀』には, 左の宋書記事に対応する出来事は全く現れない。 7~13年, 皇后(忍坂大仲姫)の妹(衣通郎姫)への執着と皇后の嫉妬。 14年, 阿波の海人男狭磯が明石の海底から決死の潜水で大真珠を獲る。男狭磯の死を悼んで墓をつくり葬る。
443	宋:元嘉20年	(宋書)倭国王済, 使を遣わして奉献す。復た以って安東將軍・倭国王と為す。	允恭紀32年	『記・紀』には左の宋書記事に対応する記述はない。 24年に木梨姫皇子の不義(実妹との密通)が発覚したとの記事がある。
451	宋:元嘉28年	(宋書)使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・募韓六国諸軍事を加え, 安東將軍は故の如く, ならびに上る所の23人を軍郡に除す。済死す。世子興, 使を遣わして貢献す。	允恭紀40年	『紀』によれば允恭は在位42年で亡くなる。その葬儀に際し新羅王は多数の楽人を送ったとある。楽人たちは麻の白服を着て調べを捧げ舞い泣いて殯宮に参会した。
462	宋:大明6年	(宋書)詔して曰く「倭王世子興, 奕世すなわち忠, 藩を外海に作し, 化を稟け境を寧んじ, 恭しく貢職を修め, 新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授べく, 安東將軍・倭国王とす可し」と。興死して弟武立ち, 自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅, 秦韓・募韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王と称す。	雄略紀6年	雄略の在位期間中に, 興と武の二人が現れることになる。 『紀』雄略6年に「呉国から貢物」という記事がある。『紀』編纂時点の近畿王朝は「南朝」の存在を知らなかったのか, 国として認めなかったのか, どちらかであろう。 半島との交渉については、『百濟新撰』などを引用・利用して雄略の事績と同期をとっている。造作・造文の可能性もある。

(つづく)

表5-2 倭の五王（九州王朝）：古墳時代（④）中期（つづき）

478	宋:昇明2年	(宋書)使を遣わして表を上る。曰く「封国は偏遠にして, 藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑をつらぬき, 山川を跋涉し, 寧処に違あらず。東は毛人を征すること55国, 西は衆夷を服すること66国, 渡りて海北を平ぐること95国..... ひそかに自ら開府儀同三司を仮し, 其の余はみな仮授して, 以って忠節を勧む」と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・募韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王に除す。	雄略紀22年	『記・紀』には, 武の上表文奉呈に対応する記述は全く現れない。 半島勢力(高麗, 百濟, 任那, 新羅)間の対立や, それに関わる倭の活動(含軍事行動)の記事はかなり多い。半島史書(百濟新撰など)の同時期の出来事を雄略紀に投影しているように見える。 大陸の交流相手は「呉(国)」と記されている。
502	梁:天監元年	梁書・武帝紀, 倭王武, 中国史書に最後の出現	武烈紀5年	武烈紀5年には, 暴虐行為の一端が描写されている。
507	梁:天監6年		継体紀元年	
527~528	梁:大通1~2年		??? 磐井の乱 ??? (継体紀21~22年)	
531	梁:中大通3年	(百濟本記)辛亥年=531年 日本の天皇及び太子皇子俱に崩薨せぬ磐井滅亡(?)	継体紀25年	継体崩薨(?)
			継体紀28年	継体崩薨

表5 (倭の五王) 補足

「倭の五王」の時代と近畿王朝15~25代(応神~武烈)が時間的に重なっているのは確かである。ただし、『宋書・梁書』の遣使年と『紀』の在位年を対照すると, 讚・珍・奇は允恭(19代)に, 興は雄略(21代)に, 武は雄略と武烈(25代)に対応する。5人の倭王が15~25代大王(11人)の中の5人である確証は何もないので, 倭の五王を相続く5代5人の大王に対応させるのは無理筋であろう。五王は近畿王朝の大王たちではない。
『紀』は, この時期の大陸王朝(南朝?)を「呉(国)」と表現している。紀編纂時点で, 倭と交流のあった南朝を「地域勢力」とみなし北朝を主と考えたのか, 『三国志』+α(魏, 呉, 蜀, 晋・西晋)までの史書しか参照できなかったのかであろう。いずれにしても, 近畿王朝は南朝の冊封体制を全く意識していない。一方, 倭の五王たちは(落ち目の?)南朝の冊封体制に律儀に従っている。このことは, 倭の五王が「漢委奴国王」, 「親魏倭王」から一貫して続く王朝(九州王朝)に属することを強く示唆する。
『紀』は, この時期の半島諸国との交流事跡を多数記している。しかし, 話の端緒や展開に切実な具体性が無く, (半島史書に記載された)列島側の主体が自分たち(近畿王朝)ではない出来事を, 編纂時点で取り込んでいる印象を受ける。

表6 遣隋使（多利思北孤，九州王朝）：古墳時代（④）後期

西暦年	元号年	国外史書	天皇年	国内史書
581	隋:開皇元年	隋, 北周より禪讓・建国(北朝). (陳はまだ存続)		
589	開皇9年	隋が南北の統一王朝となる.(陳滅亡, 陳:禎明3年)		
600	開皇20年	第一回倭国遣隋使(隋書): 倭王阿每多利思北孤号阿摩多利, 皇后多利思, 太子利歌弥多弗利	推古8年	
607	大業3年	(隋書倭国伝) 多利思北孤, 沙門數十人を隋に派遣. 「海西の菩薩天子」の口上, 「日出ずる処の天子」の国書.	推古15年	第一回(天皇家)遣隋使 大礼小野臣妹子を大唐に遣わす. 鞍作福利を通事とす(推古紀).
608	大業4年	(隋書倭国伝) 裴世清来九州, 朝命を達する. 裴世清の唯一の山河描写: 「阿蘇山有り. その石故無くして火起り, 天に接する者, 俗以て異と為し, 因って祭禮を行う...」使者清に随って隋へ至る. 方物を貢せしむ. 此の後, 遂に絶つ	推古16年	在筑紫中の裴世清に使者(吉士雄成)を派遣して来近畿を促す 裴世清 来近畿(大和). (小野妹子は隋から清に同行) 隋の国書「皇帝, 倭皇を問ふ... 皇, 海表に介居して...」小野妹子(再派遣), 吉士雄成, 4人の学生, 4人の学問僧を伴う
609	大業5年		推古17年	妹子帰国, 福利帰らず
610	大業6年		推古18年	(春正月)己丑倭国遣使献方物
614			推古22年	犬上君御田歟を派遣
615			推古23年	御田歟の帰国
618	唐:武徳元年	隋 → 唐(禪讓?)	推古26年	

表7 遣唐使（九州王朝 → 近畿王朝）：古墳時代（④）後期

西暦年	元号年	国外史書(九州王朝)	天皇年	国外史書(近畿王朝)
632	貞観5年	(旧唐書・倭国伝) 朝貢	舒明3年	舒明:(在位)629-641 皇極:(在位)642-645
645	貞観19年	(旧唐書・倭国伝) 朝貢	孝徳元年	
648	貞観22年	(旧唐書・倭国伝) 朝貢	孝徳4年	
654	永徽5年	(旧唐書本紀) 12月癸丑 巨大琥珀・瑪瑙 献ず	孝徳10年	齊明:(重祚, 在位)655-661
663		白村江での敗戦	天智称制3年	天智称制 → 天智 → (弘文) 天武 → 持統
702	長安2年		大宝2年	(旧唐書本紀) 冬10月使い遣わして方物を貢す(文武)
703	長安3年		大宝3年	(旧唐書・日本伝) 朝貢(文武)
717	開元5年		養老元年	(旧唐書・日本伝) 朝貢(元正)
760~761	上元1・2年		天平宝字4・5年	(旧唐書・日本伝) 朝貢(淳仁)
804	貞元20年		延暦23年	(旧唐書・日本伝) 朝貢(桓武)
806	元和元年		大同元年	(旧唐書・日本伝) 朝貢(桓武)
839	開成4年		承和6年	(旧唐書・日本伝) 朝貢(仁明)

素人の限界

九州王朝の存在を確認するため、「倭」勢力の対外(大陸・半島)活動を記した国外史料記事を列挙し, 対応する国内記事(存在すれば)を対置しようと試みた. しかし, この作業は内外史料(および史料批判)に関する広く深い知識を必要とするので, 俄か勉強の素人の手には負えないことを思い知った. 内外記事対応関係の精査, 国外史書倭国関連部分の(新たな発見を含めた)解釈・評価の精密化と国内史書の関連部分の解釈・評価をこの分野の専門家たち

に（改めて）お願いしたいものである。その際の作業仮説として、「近畿王朝のみが存在した（一元史観）」だけでなく、「九州王朝も同時に存在し（対外的には）『主：九州-従：近畿』であった（多元史観）」も考慮し、二つの視点から複眼的に比較・論評されることを期待したい。

後者の立場で書かれた古田の『失われた九州王朝』[3]は国内史書（『古事記』、『日本書紀』等）の「素性」について以下のように指摘している。

九州王朝の意図的無視 近畿王朝は九州王朝の存在を十分に認識していたし、人的・文物的交流（導入）もあったはずであるが、その繋がりについては黙して語らない。

権力移行（7世紀末）の隠蔽 九州王朝がどのような世界認識の下に行動し、何故破綻し、いかなる経緯で近畿王朝が列島全体を支配するに至ったかについては、一切語らない。

無視・盗用・捏造 『日本書紀』は、7世紀末新たに獲得した勢力圏（本州西部、九州）が以前から自分たちの支配下にあったように装っている。景行紀、仲哀（神功）紀の熊襲征討、継体紀の磐井の乱の記事はその装いの一部である。倭建命（日本武尊）のエピソードも（景行の熊襲征討の一部と）同工異曲のように思われる。

引用・粉飾 同じく『日本書紀』は、編纂時点に参照できた国外史料を引用・挿入したり、類似事実を誇張して記述したりして、近畿王朝が以前から列島を代表する王朝として大陸・半島と交流（交渉・対立）していたように装っている。例えば、神功*紀における二人の倭女王の貢献記事（表2）、同じく応神（神功）紀の新羅征伐の記事（表3）などがこれに相当する。

近畿限定 『古事記』は、近畿王朝（天皇家）の列島中央部における発展史を王統の継承を含め比較的正直に記憶・記録しているが、神代以降の九州王朝との交流や征服した近畿地方の旧住民（銅鐸文明）については語らない。

背乗り（背乗せ?） 『日本書紀』が含むのは、戦後史観が指摘した「造作」ではなく、九州王朝の歴史を自分の過去に取り込む「乗っ取り」の意図である。これが「一元史観」の起源であり、後世日本の大多数の史家を支配している。この史観は遣唐使を通じて大陸王朝（唐）の列島認識を上書きすることにも成功している（『新唐書』：東夷・日本）。

九州王朝が実在したとすれば

次に、九州王朝が実在したと仮定して、④の時代を漠然と想像してみる。

漢字・漢文伝来 漢字、漢文は④の時代に大陸から直接あるいは半島を経由して近畿王朝へ伝来したことになるが、九州王朝の存在を認めると、伝達の順は「九州 → 近畿」と考えるのが自然である¹⁰⁸。『記・紀』に現れる記事（表4の王仁）により近畿王朝への伝来に目が向くが、九州王朝へは④の時代より前（③の初期か）に漢字・漢文が伝わっていたのではなかろうか。少なくとも倭の中に漢字・漢文を解釈して倭語に訳せる人（倭人）がいたと思われる。漢字・漢文の組織的な受容（学習）や「音/訓」の導入はそこからそう遠くないであろう。

仏教伝来 仏教伝来時期については、古田が[3]の第四章（「仏教伝来と任那日本府」）で詳しく論じている。

仏教は3~4世紀に半島に伝わり、4世紀末には半島各王朝が仏教を保護・公認して、平壤（高句麗）や寒山（百済）に仏寺を建立していた（三国史記：高句麗本紀、百済本紀）。百済への仏教“公伝”は384年であるが、その15年前（369年）には百済王が倭王旨に七枝刀を贈っている（表3）。また4世紀末~5世紀初頭には、倭王（讃?）が半島中域まで大軍を派遣して高句麗と交戦している（表3）。このような半島国家との濃厚接触の中で、九州王朝は仏教を知り、受容（希求）したと考えられる。

近畿王朝への伝来については、『紀』に「欽明7年（壬申年、552年）、百済の聖明王が西部姫氏達率怒喇斯致契等を遣して釈迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干巻を献る。」とあるのが最初で、これを「仏教初伝」とする。しかし、上宮聖徳法王帝説には「戊午年（538年）、百済国主明王、始めて仏像・経教ならびに僧等を度し奉る。蘇我稻目宿禰大臣に勅授して興隆せしむるなり」とあり、元興寺伽藍縁起や建興寺縁起等多系統の史料にもほぼ同じ内容が記されている。時期はこちらが早いので、これを「仏教初伝」として（『紀』に）記するのが普通であろう。前者を「仏教公伝」と呼んで区別することもあるが、「初伝記事」が二通りあるのは不審である。古田は、「前者は、『百済本記』にあった対九州王朝の外交記事を、『紀』編纂時に対近畿王朝記事として記載したもの」と指摘した。『百済本記』は欽明紀において14回引用されており、

¹⁰⁸大陸、半島から直接近畿王朝へ伝わった可能性もあるが、その場合でも、伝来時期は、九州が先で近畿が（ずっと）後である。

本文にも『百濟本記』に依拠した造文が多く見られるようである。

いずれにしても、近畿王朝への仏教伝来は6世紀であり、九州王朝への伝来より100年以上晚い。近畿王朝において、いち早く仏教に帰依した蘇我氏には九州王朝との繋がりを感じる。また、552年は“磐井の乱?”(表5-2)より後であり、乱の後も九州王朝が健在であったことを示している。

「君が代」国歌「君が代」の歌詞は九州王朝で生まれ九州に伝承されたものである。今でも、金印(5.10節)で有名な志賀島にある志賀海神社の「山ほめ祭」の中で「述べ」られたり、薩摩琵琶歌「蓬莱山」の中で歌われている。公式(?)には『古今和歌集(10世紀初頭成立)』に現れる「読人知らず」の歌とされるが、実際には、古い(九州王朝健在の)時代に近畿王朝に伝わり、近畿でも歌(舞)われていたということであろう。

古田ら『「君が代」うずまく源流』[12]は、「君が代」が、糸島・博多湾岸に現存する地名(千代-ちよ、井原-いわら~いわお)、神社名(細石神社-さざれいし)、神名(苔牟須壳神-こけむすめ=磐長比壳)を詠み込んだ九州王朝の長久を祈る賛歌であったと論じている。

「海ゆかば」準国歌「海ゆかば」の詞は海を渡り異境(半島)へ出撃する大君に随伴する近衛兵(あるいは軍団)の忠誠と覚悟を歌っている。九州王朝の戦士達に代々受け継がれた詞であろう。公式(?)には、『続日本紀』の聖武天皇の宣命(749年)に引用され、万葉集(8世紀末成立)に大伴家持の作として収録されているが、それは「造作」である。宣命では「内兵たる大伴・佐伯氏に古くから云い伝えられてきた」と書かれているのに、『古事記』や『日本書紀』には現れないし、そもそも、近畿王朝の大王が水軍を率い半島で血みどろの戦いを繰り広げた形跡はない¹⁰⁹。

古賀達也[12]は、雄略紀(9年条)に記された新羅討伐における大伴談連と大伴津麻呂(同族従者)の戦死記事、宣化紀(3年条)および欽明紀(23年条)に記された新羅・高句麗征伐における大伴磐、大伴狭手彦兄弟の活躍記事は九州王朝史書からの盗用であるとして、「筑紫大伴氏」の存在を論じている。「近畿大伴氏」と「筑紫大伴氏」の間には遠い(天孫降臨あるいは神武東侵に遡る)同族関係があったのではなかろうか。

¹⁰⁹神功皇后の「三韓征伐」は半島との接触を誇張表現したものである。それは別として、近畿、東海あるいは関東の兵団が九州王朝の助っ人として動員された可能性はある。

7 一元史観仮説(H1-2) vs. 多元史観仮説(H3)

多元史観仮説(H3)は②-③-④の時代を合理的に説明し、内外史書とも整合的であると感ずるが、定説ではない。異端の少数意見として扱われている。古代史専門家/愛好者の大多数は一元史観仮説(H1, H2)を支持しており、それを定説と考えているようである。皇国史観仮説(H1)と戦後史観仮説(H2)は、④の時代についてはほぼ同じ認識なので、以後一元史観仮説を「H1-2」と表記する¹¹⁰。

H3支持者からH1-2支持者への問いかけ(H3の提示、H1-2の不具合の指摘)は目にするが、それに対するH1-2支持者からの直接的応答はほとんど見かけない。H1-2支持者は、細部における論争を避け、大規模古墳の存在と近畿王朝(天皇家)の現存を盾とした「結論ありきの雲の上論」で前者を門前払いしているように見える。実質的な論争の不在は素人にとって大変残念なことである。以下では、どうして論争が不活発なのか、その理由を考えてみたい。

7.1 それぞれの論理

念のために両仮説の主張を再確認しておく。

H1-2 列島中央部で発展した近畿王朝(天皇家)が列島を代表した唯一の王権である。

H3 列島に複数の王権(主たるものは九州王朝と近畿王朝)が併存し、列島を代表する王権は④末に九州王朝から近畿王朝へ交代した。

仮説の構築に使用される史料は両者に共通で以下のようである。

- (i) 国内文書: 『古事記』、『日本書紀』、各地『風土記』など
- (ii) 列島中央部の遺跡・遺物: 銅鏡、古墳など
- (iii) 国外文書の倭国関連部分: 『三国志』、『宋書』、『随書』、『旧唐書』など
- (iv) 国外金石文: 広開土王碑文、七枝刀銘文など
- (v) 九州関連史料: 九州年号、『万葉集』不審歌、各地神社由来など

どれを信用し、どれを疑うかによって③-④の時代の歴史像は変わってくる。

H1-2支持者は、近畿を頂点とする巨大前方後円墳の存在、景行紀(含日本武尊)・仲哀(神功)紀・磐井の乱(継体紀)に記された大和王権の軍事活動

¹¹⁰「邪馬老(台)国は九州(筑紫-福岡県)に在ったが、卑弥呼あるいは老(台)与の(後の)時代に後継勢力が大和に移動して近畿王朝(天皇家)となった」という系統の仮説もある。これも広い意味での一元史観なので「H1-2」に含める。

などを根拠に、「(大和, 山城, 河内, 和泉, 摂津に古墳を築いた) 近畿王朝が、おそくとも 4 世紀中葉までに、日本列島を“統一”していたはずで、列島を代表するのは近畿王朝以外に有り得ない」と主張する。公の学術組織に属する職業的歴史研究者のほとんどは H1-2 の立場に立っている¹¹¹。彼らは③-④の時代は「近畿天皇家の発展史として確定済み」として、その前提の下に、視野を列島中央部に限定して史料 (i) と (ii) を結びつける方向で研究を進める。

H3 支持者は、『三国志』魏志倭人伝のいう“倭” (倭国連合, 3 世紀の盟主国は邪馬壹国) が、③の時代を通して、博多湾岸を中心に半島南岸から北部九州に存在したのは確実であること、歴代の大陸王朝が一貫して「倭国」を同一の「倭国連合」と認識している¹¹²ことを根拠に、「④の時代、日本列島の中央部と西部のそれぞれに王朝 (近畿王朝と九州王朝) が存在したが、大陸・半島と深く関係したという意味で列島を代表したのは九州王朝であった」と主張する。H3 支持者の多くは、その創唱者である古田武彦の影響下にある「古代史研究会」の会員たち¹¹³である。彼らは、邪馬壹 (臺) 国を原点として史料 (i) と (iii) の“不一致”に注目し、(i) に記載されていない王権が九州北部を中心に存在し (九州王朝)、その対外活動が (iii) に記載されたと考える。

このように H1-2 と H3 の支持者が学会と在野 (古田学派) に分かれる理由は、つぎのように想像できる。

H1-2

- (i) については江戸時代から解読の研究が積み重ねられ、明治以降の歴史アカデミズムに引継がれた。その主流は戦前の H1 から戦後の H2 へと移ったが、④の時代に対する基本認識は変わらない。
- (i) は④の時代の近畿王朝 (列島中央部) について概ね史実を伝えているので、この時代を扱う歴史アカデミズムは、関連文書を対照し (i) の読解 (解釈) を精密化する方向と、豊富に存在する (ii) を整理・解釈して文書に関係付ける方向で「科学的」研究を積み重ねることができた。

¹¹¹ 邪馬台 (壹) 国九州説論者はいるが、「九州王朝説」は否定 (無視) するようである。

¹¹² 『三国志』に続く『後漢書』、『宋書』、『隋書』、『旧唐書』の倭 (国) 伝による。『旧唐書』日本伝で初めて近畿王朝が現れる。

¹¹³ 1977 年に「古田武彦を囲む会」が発足し、1983 年に「市民の古代研究会」と改称。偽書騒動や古田の逝去を経て分離・分裂し、現在は「古田史学の会」、「古田武彦と古代史を研究する会 (東京古田会)」、「古田史学の会・東海」、「九州古代史の会」、「古田武彦の歴史学を研究する会」、「多元的古代研究会」などが存続している (wikipedia による)。どの会も、会員の多くは在野の非職業的歴史研究者である。

- そのような方向で良く耕され蓄積された知識体系はアカデミズムの世界で (新しい) 研究を評価する際の強力な枠組みとなった。従って、史学アカデミズムに居場所を得ようとする新人達は、その枠組みの中で資料を発掘し読解 (解釈) を深化させる研究を志す。そのようにして、史学アカデミズムにおける近畿天皇家一元史観 (H1-2) は再生産されてきた。

H3

- 古田武彦は (i) と (iii) を整合的・合理的に理解するため③-④の時代を貫く九州王朝を想定し、[1, 3] で展開・論証した。
- 史学アカデミズムからの評価に無頓着な非職業的歴史研究者は、領域を限定して重箱の隅をつつくような細かい議論に陥りがちの H1-2 よりも、対象領域を拡げ説明変数を増やして④の時代をより合理的に理解しようとする H3 の方に魅力を感じる。
- 「古田系研究会」のメンバは地の利 (九州在住/出身) や各自の古典素養を生かし、(v) を探索して H3 の確かさを増す証拠・解釈を提示したり、H1-2 の矛盾点を論じたりしている。会誌等にその種の「論文」を発表する基幹メンバは、素人の域を超えた「非職業的歴史研究者」と呼んでも差し支えないであろう。

両仮説間での実質的な議論が低調なのは、それぞれの支持者の住む世界が異なることに起因していると思われる。

一元史観 (H1-2) と多元史観 (H3) を分けるのは、結局のところ、(i)-国内史書と (iii)-大陸史書に対する信頼感の違いである。

(i)-国内史書に対する評価

H1-2 (H1, H2) の論者は基本的に『記・紀』の内容を信用する。皇国史観派 (H1) は (原則として) それらを書かれた通りに受け入れる。戦後史観派 (H2) は古い時代に関する記述を「造作」として否定しつつ、応神 (崇神) 以降の記述を概ね信用する。H1 と H2 に共通するのは、『日本書紀』が隠し持つ「列島の中心王朝の交代を隠蔽する意志」を感知しないことである¹¹⁴。一方、H3 の論者は『古事記』を (天皇家の家伝として) 概ね信用するが、『日本書紀』については、上記の「隠蔽の意志」を見過ごさない。すなわち、九州・半島・大陸に関係した『日本書紀』だけにあつて『古事記』にない記述は、外

¹¹⁴ この隠蔽は 8 世紀当時の列島人に対する洗脳政策であるが、明治～昭和 20 年間に再洗脳があったとはいえ、令和の現在までその効果を保っているのは驚きである。

部史料からの盗用による掏替えや捏造・歪曲を含んでいると推測する、

(iii)-国外史書に対する評価

H1-2の論者は大陸王朝歴代史書の倭国関連部分に対して基本的に疑いの目を向ける。疑いの程度は、「でたらめである」、「誇張が多くて信用できない」から「年、方角、国名などに誤りが多い」まで様々であるが、一元史観との齟齬が生ずる場合、言いがかりをつけ当該部分を無視あるいは改変して齟齬を回避・解消しているような印象を受ける。H3の論者は歴代史書の倭国関連部分を基本的に信用する。それらは実地の往来（朝貢、倭地訪問、半島での戦闘）を踏まえて記録されているし、『隋書』までは列島王朝の交代（あったとして）の前に書かれたものなので、隠蔽の動機が存在しないからである。国外史書は九州王朝の存在を確実に示唆していると思われる。

7.2 仮想的論争

一元史観と多元史観の主張を命題の形に固定し、それぞれに対する（相手側からの）あり得べき反論を明示してみる。

一元史観の主張

H1-2p : 九州王朝が存在したとすれば、それを記した国内史書や（近畿の巨大前方後円墳に匹敵する）大規模遺跡が九州に存在するはずであるが、それらは見当たらない。よって九州王朝は存在しなかった。

H1-2p' : ④の時代の名称（古墳時代）が由来する巨大古墳は（サイズの）近畿を頂点として分布している。よって列島を統一的に支配・代表していたのは近畿王朝である。

「無かったこと」を証明するのは難しいので、H1-2p'のように九州王朝の存否に触れず、近畿王朝が列島の唯一の王朝であったことを主張することが多い。

多元史観の主張

H3p : 九州王朝が存在しないとすると、国外史書に記載された倭の動向が国内史書に全く書かれていないことを説明できない。よって九州王朝は存在し、大陸・半島の勢力から列島を代表する王朝と見なされていた。

H3は、存在する内外史料間の矛盾を指摘して前提（九州王朝の不在）を否定する背理法である。存在するもの同士の矛盾を扱うので理路は安定している。

「邪馬壹国九州（筑紫）説」や6.2節の対応表で示した内外史書の矛盾（不対応）の指摘は、H3pの直接的主張である。

一元史観から多元史観への反論

- ・『三国志（倭人伝）』の記す邪馬壹（臺）国の所在地は近畿である。
- ・『隋書倭国伝』中の裴世清の行路記事における「彼都」は近畿に在る。
- ・『記・紀』は「造作」による記述を少なからず含み、事実を漏れなく記録したものでないもので、不一致（不対応）は問題にならない。

多元史観から一元史観への反論

- ・九州王朝の史書は存在したが、それらは王朝崩壊（白村江での敗戦と近畿王朝への吸収）の過程で失われ、滅却された。
- ・『日本書紀』の神代の巻に多数引用されている「一書」や、『宋書』倭王武の「上奏文」はその種の史書が存在したことを窺わせる。
- ・九州年号を伝える資料やその年号を用いた断片メモが存在する。
- ・巨大古墳といっても石棺（石室）は人間のサイズに見合うものであり、本質的部分の大きさは九州を含む各地の古墳で大差ない。「前方後円墳」という形式自体は北九州（九州王朝）で発生したものである。
- ・非本質部分の巨大化は自ら（近畿、東海、関東）の後進性を払拭し実力を顕示する欲求の現れではあるまいか。列島中・東部の勢力が征服・支配した各在地集団の人々を墳墓の築造・維持に使役した可能性もある。
- ・近畿等で巨大古墳が作られる頃、倭の五王たち（九州王朝）は半島での軍事行動（対高句麗）に忙しく、巨大古墳を作る動機も余力もなかった。
- ・九州王朝の墳墓の先進性は大陸王朝（南朝）の影響を受けた「石造物（石人石馬）による装飾」に現れている。

以上は、表面的主張を並べたものに過ぎない。専門家達には、それらを裏付ける論証（史料の提示・解釈等）の応酬をお願いしたいところである。

多元史観の側は、その創唱者である古田が[1]と[3]で克明な主張と反論を行っている。一方、一元史観の側からは論証を伴う本格的な主張と反論が聞こえてこない。7.1節で述べたような事情により一元史観の専門家にとって「九州王朝」は盲点であり、応え難いのかもしれない。仮説相撲を観戦する素人（筆者）の眼には、不戦勝に近い形で多元史観仮説（九州王朝説）が優勢のように見える。

8 まとめ

筆者は30代前半に古田武彦の『「邪馬台国」はなかった』[1]に出会った。偶々妻の実家で手に取ったのであるが、明晰で合理的な立論に感動したので憶えている。60を過ぎたころ読み返し、さらに『失われた九州王朝—天皇家以前の古代史—』[3]（ミネルヴァ書房の復刻版）を読んで、古田の九州王朝説（多元史観）は日本列島古代の真実を捉えていると感じた。ただ、これらの本は論証（論理性）を重視して徹底的に書かれているので、読んでいるときは（局所的に）分かったような気になるが、読後に自分の頭の中で全体を思い浮かべようとすると（素人である筆者は）困難を感じる。そこで、古田の所説を時間の流れに沿って“教科書風に”記述してみようと考えた。5節と6節はそれを試みたものである。3節で触れた“縄文の集落ネットワーク”は、“弥生初期のクニネットワーク”を経て“多元王朝”へと自然に接続する。九州王朝説（多元史観）には、日本列島の古代史を構造的に理解させる力があると思う。

ところで、九州王朝説（多元史観）は「対外戦争に敗北して滅亡した王朝を自身の歴史から抹殺した」ことを我々に意識させたりもする。この抹殺は戦勝国唐の（列島への）進駐と後継勢力への監視下で行われた（と推定される）。このことは「つい最近の対外戦争で滅亡した大日本帝国の主張（言い分）の抹殺」を連想させる。この抹殺も戦勝国米の進駐と監視の下で行われた¹¹⁵。第一の抹殺がなければ、皇国史観は成立し難く、今次の対外戦争（大東亜戦争）はもう少し冷静に遂行された可能性もある。第二の抹殺は現代史の問題であるが、「正しく」記録（記憶）しておくことの重要性を強く感ずる。

7世紀末まで九州王朝が存在し、列島を代表していたことは確実と思われる。しかし、その姿形が具体的に見えないことも事実である。素人としては想像を逞しくしてそれを補いたい誘惑に駆られる。しかし、想像は自由であるが、十分な裏付けなしに思い付きを仮説として主張することには注意しなくてはならない。慎重な検証が必要である。この問題については、河西良治[22]、川瀬健一[23]らが鋭く指摘している¹¹⁶。素人としては、九州王朝の様子につ

いて、不確定部分を含む低解像度の理解に耐えながら（勝手な）想像を楽しむことになろう。近畿王朝については通説を割り引いて想像することになる。

九州王朝の解像度を上げるためには、文献史料の精査に加えて、考古学的研究（遺物の発見・編年・解釈等）が期待される。考古学（③～④時代）の知見の多くは、文献史料を基準に解釈・編年して得られるが、現在の考古学は一元史観仮説に独占されている。「近畿王朝のモノ」と確定できない遺物（例えば九州や関東から出土する）については、多元史観仮説（九州王朝説）の立場からも検討・研究されるべきであろう。

¹¹⁵この監視はいまだに有効なようである。

¹¹⁶二人は多元史観仮説を支持する立場である。[22]は『記・紀』の中に、「九州王朝からの盗用」を見ること（H3の立場から）と、「編纂者の造作」を見ること（H2の立場から）のある種の「類似性」を指摘している。[23]は「国分寺」の起源と「国分」の意味（九州王朝との関連）に言及している。

参考文献

- [1] 古田 武彦：『「邪馬台国」はなかつた—解説された倭人伝の謎—』，朝日新聞社，1971. (朝日文庫，1992)
- [2] 石田 英一郎 (編)，伊東 信雄，井上 光貞，江上 波夫，小林 行雄，関 晃：『シンポジウム 日本国家の起源』 (角川文庫 2944)，角川書店，1972.
- [3] 古田 武彦：『失われた九州王朝—天皇家以前の古代史—』，朝日新聞社，1973. (朝日文庫，1993) (ミネルヴァ書房，2010)
- [4] 古田 武彦：『盗まれた神話—記・紀の秘密—』，朝日新聞社，1975. (朝日文庫，1993)
- [5] 次田 真幸：『古事記 (上) 全訳注』 (講談社学術文庫 207)，講談社，1977.
- [6] 平泉 澄：『物語日本史 (上)』 (講談社学術文庫 348)，講談社，1979.
- [7] 次田 真幸：『古事記 (中) 全訳注』 (講談社学術文庫 208)，講談社，1980.
- [8] 古田 武彦：『古代は輝いていた I—『風土記』にいた卑弥呼—』，朝日新聞社，1984.
- [9] 古田 武彦：『古代は輝いていた II—日本列島の大王たち—』，朝日新聞社，1985. (朝日文庫，1988)
- [10] 宇治谷 孟，『全現代語訳日本書紀 (上)』 (講談社学術文庫 833)，講談社，1988.
- [11] 古田 武彦：『吉野ヶ里の秘密—解明された「倭人伝の世界」—』，光文社，1989.
- [12] 古田 武彦，灰塚 照明，古賀 達也，藤田 友治：『「君が代」，うずまく源流』 (市民の古代・別巻 3)，新泉社，1991.
- [13] 西尾 幹二 (新しい歴史教科書をつくる会 編)：『国民の歴史』，産経新聞社，1999.
- [14] 小路田 泰直：『「邪馬台国」と日本人』 (平凡社新書 073)，平凡社，2001.
- [15] 藤堂 明保，竹田 晃，影山 輝國 (全訳注)：『倭国伝—中国正史に描かれた日本—』 (講談社学術文庫)，講談社，2010 (学習研究社，1985).

- [16] 室谷 克実：『日韓がタブーにする半島の歴史』 (新潮新書 360)，新潮社，2010.
- [17] 片山 一道：『骨が語る日本人の歴史』 (ちくま新書 1126)，筑摩書房，2015.
- [18] 五味文彦，鳥海靖 (編)：『新もういちど読む山川日本史』，山川出版社，2017.
- [19] 津田 左右吉：『古事記及び日本書紀の研究』 (復刊に伴う編集あり)，毎日ワンス，(2012)2018，(洛陽堂 1919).
- [20] 舍人親王他 (撰)：『日本書紀・巻第七／景行天皇，成務天皇』，<http://www.seisaku.bz/nihonshoki/shoki.07.html>，2019-07-20 閲覧.
- [21] ウィキペディア (フリー百科事典)：『三国史記』新羅本紀，卑弥呼関連年譜，<https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- [22] 河西良治：『古代史の論点—九州王朝説の意義—第一章』，<http://www2.odn.ne.jp/~cbe66980/Main/kyuusuu-no-igi01.htm>，2020-04-25 閲覧.
- [23] 川瀬健一：『いかにして「前期難波宮九州王朝副都説」が虚妄であることに気が付いたのか—「自分史」的考察— (訂正版)』，<http://kawa-k.vis.ne.jp/2017624hukuto.pdf>，2020-04-25 閲覧.

古田武彦



古田武彦の多元史観仮説による日本列島古代通史
令和2年（西暦2020年）6月12日
©沼田一道